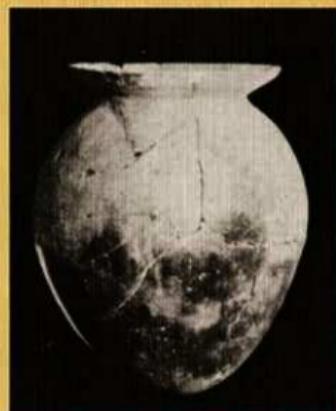


佐賀県文化財調査報告書第36集

# 戊 遺 跡

小城郡三日月所在

佐賀県教育府文化課



佐賀県教育委員会

# 戊 遺 跡

佐賀県教育委員会



戊遗址A地点出土青磁器

## はじめに

本県におきましても農業の近代化を図るための圃場整備事業が県農地林務部等の指導で数年前から推進せられているところであります。しかしに、県教育委員会では圃場整備地域の遺跡が破壊されることを憂慮し、事業の施行に先立って圃場内の埋蔵文化財の保護と調査に当っているところであります。

この調査報告書は昭和50年度に実施した三日月町戊遺跡の調査記録であります。この遺跡で確認された方形周溝墓は、佐賀平野最西端の平野部に位置するものとして注目され、また、中世の環濠住居跡あるいは平窓跡などが調査されたことは資料に乏しい中世史の研究に必ずや貢献するもの信じてやみません。

なお、本書の刊行にあたり調査・整理および執筆を担当していただいた方々、および関係各位のご協力に対し厚く感謝申し上げます。

昭和51年3月28日

佐賀県教育委員会

教育長　瀬戸口　芳夫

# もくじ

はじめに

I 序 説	2
1. 発掘調査の経過	2
2. 戊遺跡の位置と環境	5
II 戊遺跡の遺構・遺物	9
1. 戊遺跡A地点	9
(1) 住居跡	9
(2) 環濠住居跡	15
(3) 墓 跡	26
2. 戊遺跡B地点	32
(1) 墳 墓	32
(2) 穴住居跡	38
3. 戊遺跡C地点	42
(1) 方形周溝墓	42
III まとめ	50
あとがき	80

## 挿 図 目 次

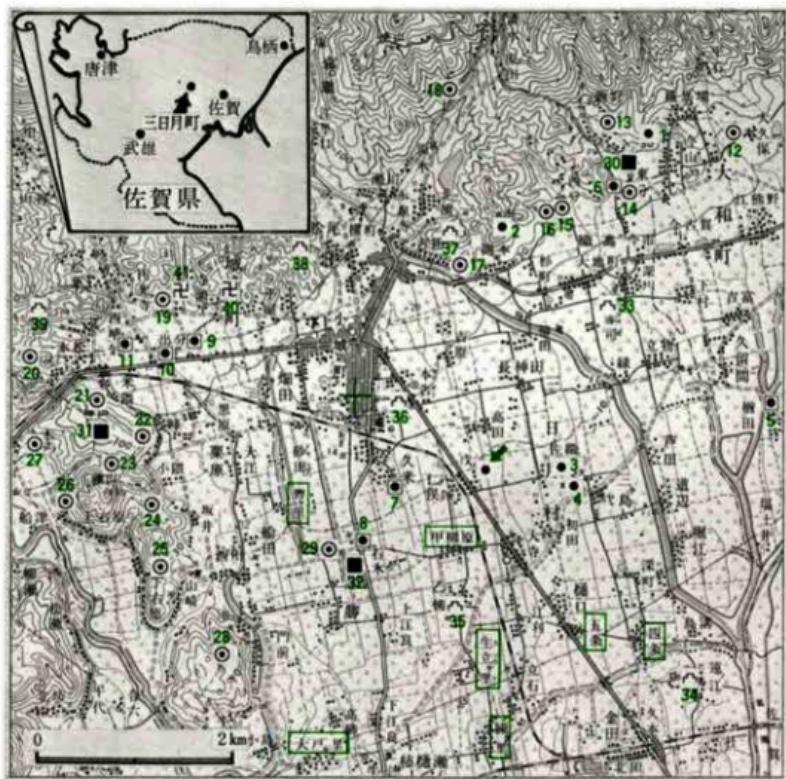
第1図 戊遺跡の周辺	1
第2図 戊遺跡遺構配置図	8
第3図 戊遺跡A地点遺構配置図	(※ 所込)
第4図 住居址(A)実測図	9
第5図 pit出土土器実測図	10
第6図 戊遺跡A地点出土土製品実測図	11
第7図 第1NS溝南部周辺遺構配置図	12
第8図 外溝断面実測図	14
第9図 内溝南門周辺実測図	16
第10図 内溝断面実測図	17
第11図 井戸址実測図	18
第12図 pit3実測図	19
第13図 外溝出土青磁碗実測図	20
第14図 外溝出土瓦器実測図	21
第15図 外溝出土滑石製品実測図	22
第16図 内溝出土遺物実測図	23
第17図 井戸址出土遺物実測図	24
第18図 竪穴(P3)出土土器実測図	25
第19図 小竪穴(P4)出土土器実測図	26
第20図 A・B窯実測図	27
第21図 A窯址出土土器実測図	28
第22図 B窯址出土土器実測図	29
第23図 D窯址出土土器実測図	29
第24図 戊遺跡B地点遺構配置図	30
第25図 第1号斐棺墓実測図	32
第26図 斐形土器実測図	33
第27図 第1号箱式石棺墓実測図	34
第28図 第2号箱式石棺墓実測図	35
第29図 第2・3号石蓋土壙墓実測図	36
第30図 竪穴住居址実測図	37
第31図 竪穴住居址出土土器実測図	39
第32図 方形周溝墓実測図	40
第33図 方形周溝墓西溝断面図	42
第34図 方形周溝墓溝内出土土器実測図(1)	44
第35図 方形周溝墓溝内出土土器実測図(2)	46
第36図 方形周溝墓溝内出土器実測図(3)	48

# 図 版 目 次

1. A 区 pit 1 の状況 (A 地点) .....	54
2. A 区 pit 2 の状況 .....	54
3. pit 1 周辺出土の土製品 .....	55
4. 第 1 EW 溝付近の状況 (pit 1 地区) .....	56
5. 第 1 EW 溝断面 (外溝) .....	56
6. 第 1 EW 溝付近の状況 (外溝) .....	57
7. 第 1 EW 溝断面 (外溝) .....	57
8. 第 1 NS 溝北部遺物出土状況 (外溝) .....	58
9. 第 1 NS 溝北部断面 (外溝) .....	58
10. 第 2 NS 溝南門付近 (内溝) .....	59
11. 第 2 NS 溝断面 .....	59
12. 第 3 NS 溝門付近 (内溝) .....	60
13. 南門址の周辺 .....	60
14. 井 戸 址(1) .....	61
15. 井 戸 址(2) .....	61
16. pit 3 の状況 .....	62
17. 掘立柱の礎石の状況 .....	62
18. 青 磁 器 .....	63
19. 瓦 器 .....	64
20. 滑石製品 .....	64
21. 窯跡(1) (左 B 窯・右 A 窯) .....	65
22. 窯跡(2) .....	65
23. A 窯土器出土状況(1) .....	66
24. A 窯土器出土状況(2) .....	66
25. A 窯出土土器 .....	67
26. B 窯出土土器 .....	67
27. 井戸址出土青磁器 .....	68
28. A 区 H - 1 出土土器 .....	68
29. 第 1 号甕棺墓・第 2 号石蓋土壙 (B 地点) .....	69
30. 第 1 号石棺墓 .....	69
31. 第 2 号石棺墓 .....	70

32. 第 5 号甕棺	70
33. 住居址	71
34. 住居址の土器出土状況	71
35. 住居址出土土器( B 地点 )	72
36. 方形周溝墓(1) ( 北東隅 ) ( C 地点 )	73
37. 方形周溝墓(2) ( 北西隅 )	73
38. 方形周溝墓溝内の土器出土状況	74
39. 方形周溝墓断面 ( 北西溝 )	74
40. 方形周溝墓出土土器(1)	75
41. 方形周溝墓出土土器(2)	76
42. 方形周溝墓出土土器(3)	77
43. 方形周溝墓出土土器(4)	78

第1図 戊遺跡の周辺



先土器・縄文時代 1.竜王遺跡 2.岡本遺跡 3.佐織遺跡 4.三日月中学校遺跡

弥生時代 5.久留間遺跡 6.東分弥生墳群遺跡 7.西仁保遺跡 8.土生遺跡(国指定史跡) 9.寺浦弥生遺跡 10.晴田小学校庭遺跡 11.宿遺跡

古墳時代 12.船塚(県史跡・前方後円墳) 13.西野古墳群 14.姫塚(後方後円墳) 15.円山古墳 16.地蔵山前方後円墳 17.城側山古墳 18.原田古墳群 19.コウザン山古墳群 20.一本松古墳群 21.米ノ限古墳群 22.峰古墳群 23.姫御前古墳(鏡山古墳群) 24.弁財天古墳(坂井古墳群) 25.丹坂峠古墳 26.越原古墳群 27.渋木古墳群 28.深底籠古墳群 29.久蘇遺跡

歴史時代 30.東分藏骨器出土遺跡 31.峰山藏骨器出土遺跡 32.石木遺跡 33.赤司(目)城(伝) 34.高田城(伝) 35.持永城(伝) 36.平井館(伝) 37.千葉城 38.松尾城 39.晴気城 40.星巖寺 41.晴気廃寺跡

条里制遺名

# I 序 説

## 1. 調査の経過

最近、農業近代化のための圃場整備事業が本県においても強力に推進されつつある。本県の場合、鉱害復旧事業に係る圃場整備事業によって宿遺跡および土生遺跡等が確認調査され、県営圃場整備事業に係る萬葉・寺ノ下遺跡、鶴崎・柏崎遺跡および石木遺跡などの遺跡について調査が実施されてきた。また、農業構造改善事業による圃場整備事業によって寺浦住居遺跡などが調査されている。

この戊遺跡は佐賀県三日月北部圃場整備事業に伴ない、昭和50年度に発掘調査を実施したものである。

### (1) 発掘調査団

この遺跡の発掘調査は、佐賀県教育委員会が担当し、事務局を文化課内において実施された。発掘調査団は次のとおり編成された。

調査主任 木下 巧 県教育文化課文化財調査係

調査員 天本洋一 同 上

調査補助 七田忠昭

調査助言 木下之治 県教育文化財調査監

なお、本調査に当っては、三日月町有志の方々や松尾建設の協力をえた。

### (2) 発掘調査の経過

#### 第1次発掘調査

調査期間 自昭和50年6月1日・至8月22日

整理 自昭和50年8月24日・至10月31日

対象 三津及び仁俣地区約60町歩(ha)

主眼 この三日月町一帯は、本県に於ける古代条里制造構（小城郡の内）が神埼郡とともに顯著な地域とされている。従って、圃場整備事業によってこの遺構が破壊・湮滅する前にその遺構を探査すること、三日月と云う地名の語源に「土師部住で甕を造て御調に奉りし」というところから窯跡の有無、および残存するその他の遺構の調査を主眼としてこの発掘調査に当たったのである。

予備調査の結果、戊A地点に南北に走る溝と東西に交叉する溝状造構を、また西仁俣において弥生時代の住居址を確認したのである。

戊A地点の溝状造構を確認したとき、まさしく条里制における溝の区割りであろうと予察されたのであったが、溝内からの出土遺物は瓦器・白磁・青磁などであって、条里制造構とは、直接関係がないであろうと推定されるに至ったのである。また、東西に走る溝は北方及び南方では確認することができなかった。この溝状造構に隣接するピットから古式土師器を検出したが、造構は確認できなかった。

また、この溝状造構が埋没した後この地は平窯がいくつも形成されたものと考えられる。

西仁俣遺跡は、土生部落との境界点に位置する遺跡であって、東・北・西方にその範囲は広がっているものと推定される。なお、東方に広がる造構部分については設計変更により保存されることになったことを付記しておく。

## 第2次発掘調査

調査期間　自昭和50年12月17日・至昭和51年3月31日

整理　自昭和51年3月2日・至昭和51年3月31日

対象　三津・仁俣・生土 約60町歩(ha)

三津15町歩の予備調査の結果、戊B地点において土師系碗および石蓋土壙墓が発見され、戊C地点からは土師系壺等が密集した状態で出土した。また、戊D地点では土師系土器の出土をみたのである。

昭和51年1月7日から本調査に移行し、戊A地点では、溝状造構に係る面的調査を西方にむけて実施した結果、無数のピット群の存在が明らかとなり、このピット群は掘立柱址であることが判明した。この調査地域内では井戸址も確認され、この居住址が周囲を溝で囲んだ——北方溝は不明であるが——所謂環濠住居址であろうことが確認されたが、この発見は中世史研究上とくに注目されることであろうと思われるのである。

戊B地点においては石棺墓2基・石蓋土壙墓2基と斐棺墓5基が確認されたが、ほとんど破壊されていた。しかし、平野部に於ける斐棺墓等の存在が確認されたことは、本県においては現在まで他に余り例がなく、注目される点である。

また、土師系碗・壺・高壺などが群をなして出土した。これらの遺物が出土したと

ころは、その遺構からみて住居址とは断定し難いが、この種の遺構の事例に乏しいため、その性格は明らかでなく、一応住居址として報告しておき、将来に期したい。

戊C地点では、方形周溝遺構が調査された。この方形周溝遺構は佐賀平野部最西端に位置するものとして注目されるのであるが、溝内の土器出土状況も県内の他の方形周溝遺構とは異なる特色を有していた。これの内部主体については確認することができなかった。

これらの調査は2月29日まで続行したが、戊D地点は覆土して温存されることになっているため、調査対象から除外した。また、三津・仁俣および土生の45町歩の予備調査は3月2日から3月31日まで実施した。

その結果、第1次調査で確認された西仁俣遺跡の東北部および土生境西方にその遺構が展開しており、また、土生遺跡の北方、牛津・小城県道東側沿いに遺跡の広がりがみられたので、この遺跡を土生遺跡B地点とすることにした。

## 2. 遺跡の位置と環境

### (1) 地理的環境

三日月町は佐賀平野の西部に位置している。東は佐賀郡大和町に、西は小城町に境を接している。三日月町の北部は天山山系の南麓を形成し、南部は有明海へとのびる沖積層の平野部であって県下屈指の穀倉地帯となっている。

天山から流下する祇園川が、平野部の北西部から南東に向かって流れ、ゆるやかに南進しながら嘉瀬川と合流しているが、過去においてその河道をいくどなく西流・東流を繰り返しながら現在の河道となっている。この三日月平野は祇園川の堆積作用によって形成された沖積平野であるが、小城町の馬場を扇頂として、東南方約3kmに及ぶゆるやかな傾斜をもつ扇状地を形成しているともいえるのである。

三日月町の農業にとって祇園川の水資源は古代から必要かくべからざるものであり、これが現代三日月農業を支えてきたと云っても過言ではない。

戊遺跡は、この扇端近くに在って標高約10mの地点に位置している。

### (2) 歴史的環境

肥前風土記小城郡の条には「昔者比村有土蜘蛛。造堡隠之。不従皇命。日本武尊巡幸之日、皆悉誅之。因号小城郡」とある。これが小城郡に関する文献上の初見であって、8世紀初頭すでに小城という地名が存在していたことが判明する。この「堡を造りて」という場所は現在でも確定していないが、川上川よりも西方であろうことは疑うことのできない。

それはともあれ、三日月町の周辺には東分下古賀・犬塚山あるいは岡本先史遺跡をはじめ彦島などに先土器時代の遺跡が点在する。縄文時代晩期には竜王遺跡・三日月中学校縄文晩期遺跡・佐織遺跡などが知られているが、縄文時代の生活遺跡はもっと広い範囲に広がっているものと推察される。弥生時代の遺跡は急激に増加を見るのであって、土生遺跡をはじめ西仁俣遺跡・寺浦弥生遺跡・久留間遺跡などの住居跡・戊遺跡B地点・晴田小学校庭弥生遺跡・宿遺跡・玉毫寺裏弥生遺跡・東分弥生斐棺遺跡・吉田弥生遺跡などの群集墳墓が形成され、この地域に広く稻作農業が普及していたことを物語っている。

古墳時代前期の遺跡的空白期を経て、県史跡船塚（前方後円墳）・県史跡姫塚（前方後円墳）・円山古墳（円墳）・地蔵山前方後円墳・宮戸前前方後円墳などの古墳が

5世紀後半ごろから山麓部に築造されるようになる。その後、峰山山系に築造された丹坂崎古墳・姫御前古墳などを経て、男女山古墳群・西野古墳群が大和町境に、小城町西部の笠頭山から南に延びる峰山山系に一本松古墳群・米ノ隈古墳群・峰古墳群・鏡山古墳群・坂井山古墳群・山崎山古墳群と続き牛尾山の深底籠古墳群などの群集墓が形成されている。

しかし8世紀にはいると、その遺跡は姿を消し中世までの間考古学的空白時代を示現する。この間にあって肥前風土記に「小城郡」が登場し、和名類聚抄には「小城郡斐調（美加都岐）あり、名義は上古に土師部住で斐を造りて御調に奉りしなどにて負せたるべし」と記され、10世紀前葉にいたる三日月町の片鱗を知ることができるのであるが、延喜式には肥前國から焼物を調査した記録はなく、「斐を造りて御調に奉りし」という斐調（美加都岐）の地名起源が何に根拠をおくものか明らかでない。また、大化革新以来施行されてきた所謂条里制の遺構が三日月町は顕著であって、その遺称地が多く伝存している。

土地の区割は方6町ごとに区画されていて、四条・五条の地名があり、また、甲柳ヶ里・久米ヶ里などの遺称地が今日まで伝えられている。

ともあれ、古墳時代にはすでに農耕集落の原形が基本的に成立しており、条里制の施行によって農耕集落がほぼ完成されたと言えるであろう。

律令制や荘園制については記録が少なく、詳細な点は不明であるが、三日月町乙柳付近には「大楊莊」（立券承暦5年1081）があり83町1段とし、赤司付近には「赤自莊」（立券永承元年1046）があって24町2段をその範囲とし、ともに宇佐八幡宮の神領となっている。

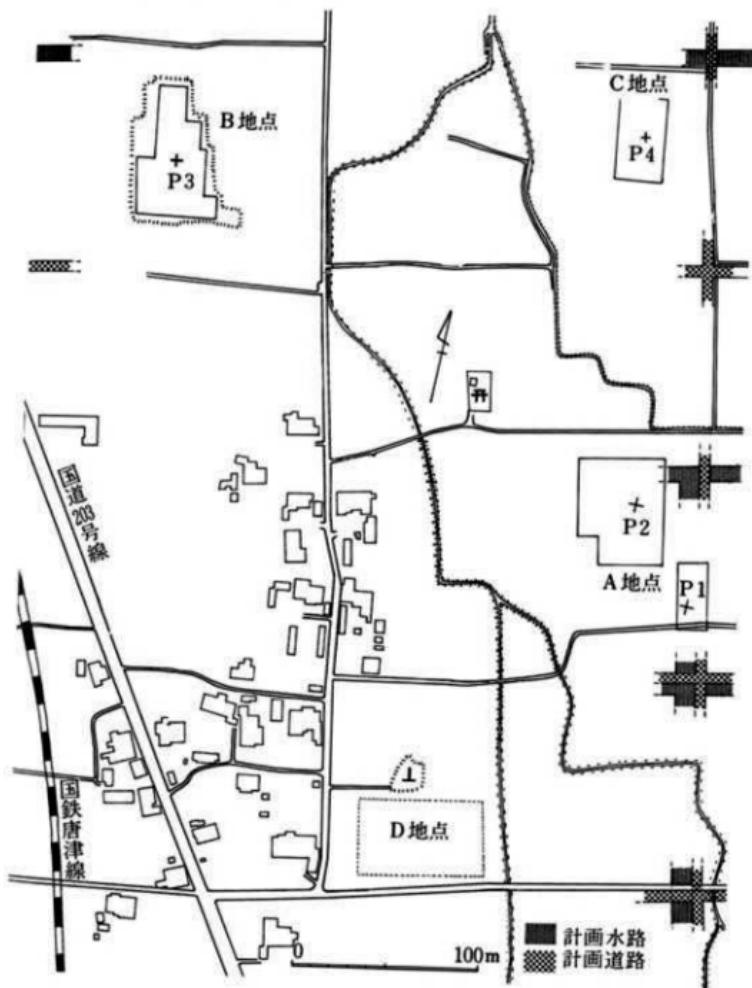
中世史については三好不二雄氏の「佐賀県史」で概観していただき、小城郡における千葉氏・少弐氏等の政治的・経済的な動向や諸文化については「小城町史」を参照願って、ここではふれることにしたい。

- (1) 七田忠志 「原始時代」佐賀県史所収 昭和43年9月
- (2) 志佐輝彦 「竜主繩文遺跡調査概報」教育佐賀 昭和33年12月
- (3) 「佐賀県の遺跡」佐賀県文化財調査報告書第13集 昭和39年3月
- (4) 高島忠平 「三日月町佐織夜臼式土器」新郷土第319号 昭和50年10月
- (5) 木下之治・木下巧他 「土生・久蘇遺跡」佐賀県文化財調査報告書第25集 昭和

48年3月

- (6) 松尾植作・七田忠志 「久留間遺跡調査概報」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告第10集 昭和26年3月
- (7) 摂 稿 「晴田小学校庭遺跡」小城町史所収 昭和49年3月
- (8) 摂 稿 「宿遺跡」 小城町史所収
- (9) 吉村茂三郎 「宮戸古墳」佐賀県史跡名勝天然記念物第7集
- (10) 摂 稿 「丹坂峠古墳の調査」小城の歴史第14号 昭和48年3月
- (11) (3)に同じ
- (12) 摂 稿 「一本松古墳群」小城町史料第1号 昭和45年3月  
同 「一本松古墳群調査概報」小城町史料第4号 昭和46年3月
- (13) 八幡宇佐宮神領大鏡

第2図 戊遺跡遺構配置図



## II 戊遺跡の遺構・遺物

### 1. 戊遺跡A地点

戊遺跡は明治24年に完成したとされる地籍図に大字長神田字「戊」とある地域であつて、現在「三津」と呼称されているところである。この名称の変化についてはさだかでないが、遺跡名としては「戊」をとつて称することにした。

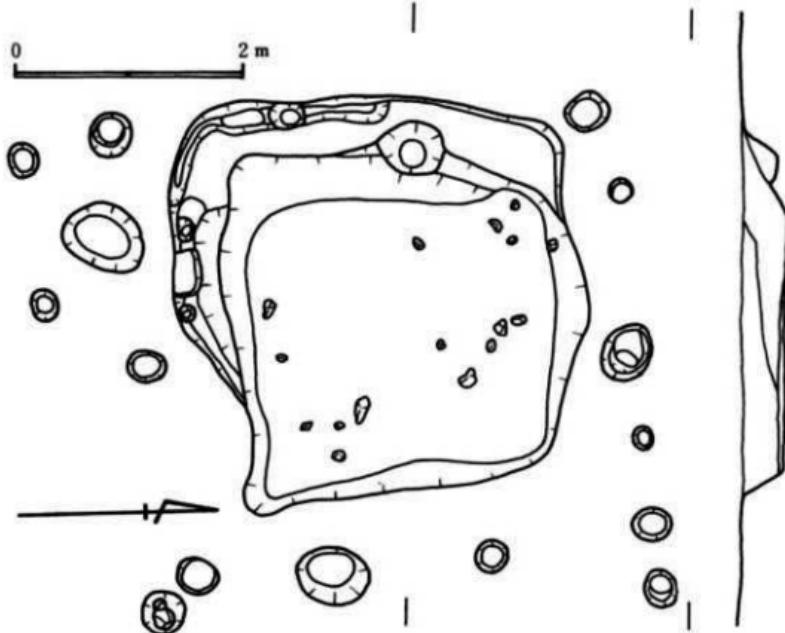
戊遺跡A地点は、戊部落の北方に鎮座する「きっちょうさん」(神社)の東南東約150m地点(標高10.84m)に在つて、古墳時代初頭の生活址および中世の環濠住居跡・窯跡からなる複合遺跡である。

#### (1) 住居跡

##### 1 遺構

この調査区域内から古式土師器片が所々に検出されたところから、古墳時代の生

第4図 住居址(A) 実測図

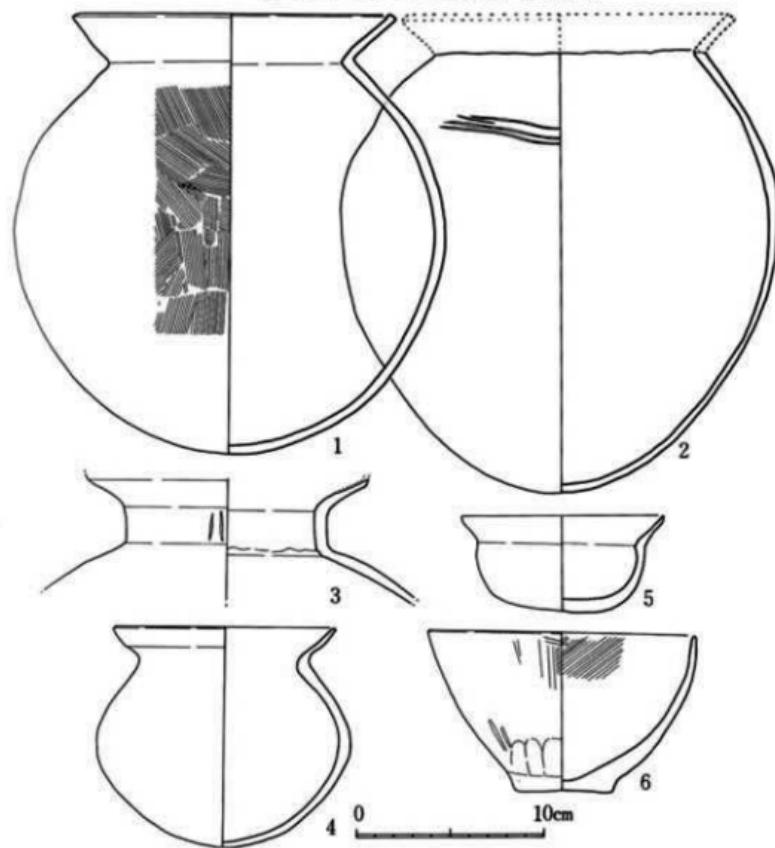


活址の存在が推定されたのであるが、調査の結果、幾世代にもおよぶ生活遺構が重複していることが確認された。そのため、当初の遺跡はほとんどが破壊されていることが推定されたのである。

調査区のはば中央部に方形を呈する整穴式住居址がある。上面幅東西 3.5m・南北3.65m、床面の東西 2.4m・南北 2.6m、床面までの深さは38cmを測る。この住居址の西壁から南壁にかけて幅約50程度の造り出しがあり、西壁のはば中央部に上面径45cm・深さ29cmの pit があって、これは一次的なものであろうと考えられる。

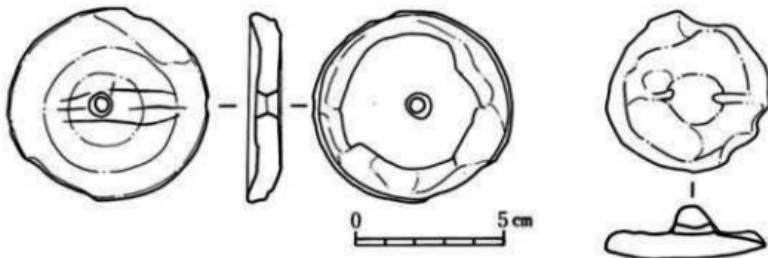
この住居址から炉址は確認されず、また、この住居址に係る柱穴も明らかにすることはできなかった。

第5図 pit 出土土器実測図



この住居址の東方約40m地点に、南北に走る溝造構があつて、その南部に西へ走る第1 EW溝造構の交叉地点に一つの造構群がある。上面幅85cm・深さ50cmのpitであつて、壺形土器など6個体分が検出され、その北東50cm位には長径60cm・短径40cmを測る長方形の穴があり、壺形土器・碗形土器を出土した。これらは一種の貯藏穴であろうと考えられる。このpit群の北に隣接して東西に流れる第2 EW溝があつて上面幅60~80cm・深さ15cmを測り、残いU字断面を呈する。この溝はこれらのpitに付随する造構と考えられ、溝内から土器とともに紡錘車が出土した。しかし造構の在り方からみてこれらは現在まで残存した当初造構のごく一部分であつて、大部分は後世になって破壊され湮滅したものと推察された。

第6図 戊遺跡A地点出土土製品実測図



## II 遺 物

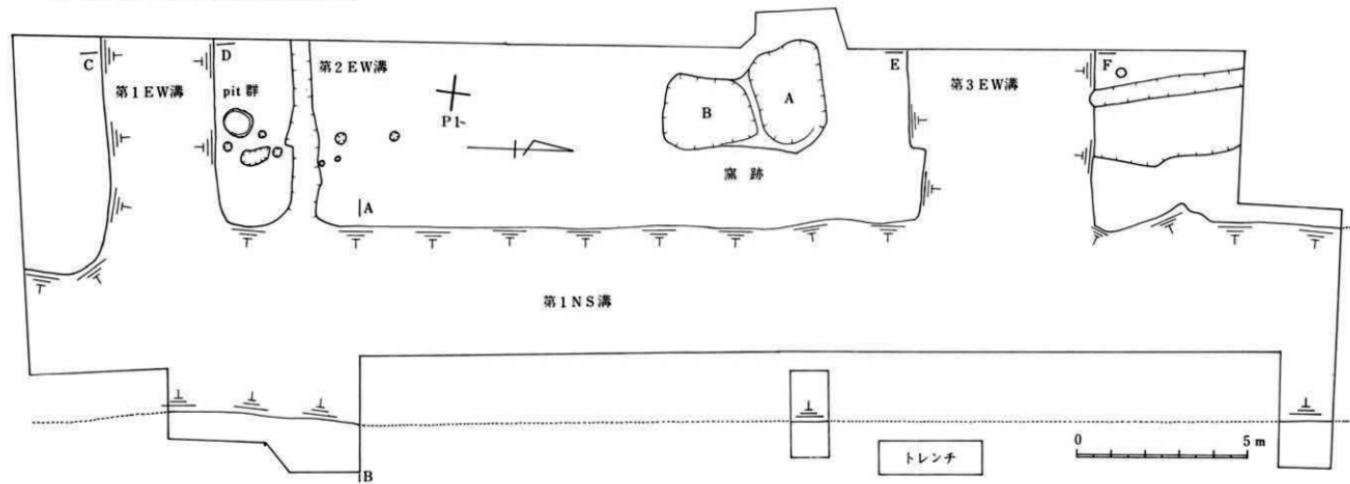
pit 1からは6個体の土器を検出した。PI-1は口縁径17.2cm・高さ23.4cmを測る。球形を呈する胴部にく字状に外反する口縁部をもち、口唇内側はやや上向きに突き出ている。肩から胴部にかけて刷毛目が斜位・横位に軽いタッチで施されている。胎土に砂を含むが焼成は良好である。口縁部から胴部は黄褐色、胴下部から底部にかけては暗褐色から黒色を呈する。器体内部は黄褐色を呈する。

PI-2は口縁部を欠損しているがPI-1と同様く字状を呈するものと推察される。肩部から胴部の張りはPI-1同様であるが、底部がやや尖っている。肩部に3ないし4条の櫛目文を有している。灰褐色を呈し、砂(細)を多量に含む胎土であつて焼成は良好である。

PI-3は壺形土器であつて口縁上部および胴部を欠損するものであるが、球状の胴部と二重口縁をもつ土器であろうと考えられる。

PI-4は胴が張り、丸底状を呈している。張った胴部から急に狭まりながら頸部

第7図 第1 NS溝南部周辺遺構配置図

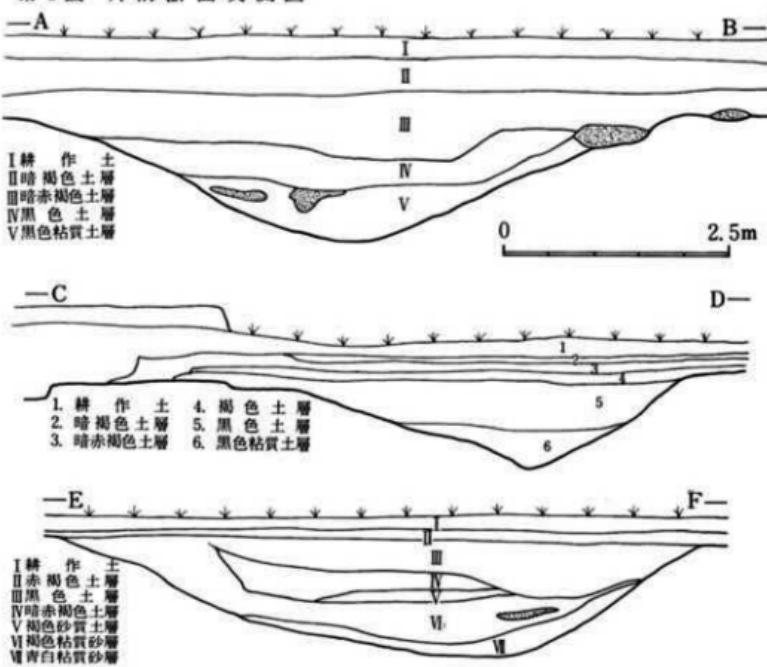


へと至り、く字状に外弯する口縁部をもっている。外反する口縁は途中からやや上向きの様相を呈している。明るい赤褐色を呈するが、底部は黒褐色を呈する。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良い。口縁径11.8cm。

pit 2 からは變形土器と碗形土器が出土した。P2-1 は胴部下を欠損しているがく字状を呈する口縁部から張りのみられない胴部へと続いている。口縁部は横位に撫でて整形し、肩から胴部にかけて継位の軽い刷毛目を施して調整している。胎土に砂を含み焼成も良好であり、黒褐色を呈する。口縁径17cm。

第2 EW溝からの出土した紡錘車は直径 6.5cm・厚さ 0.8cmの円盤状の土製であり、その中央に最小径0.5cmの孔（両穿孔）がある。この片面中央部には3本の陰刻（川）がある。この紡錘車は土器底部を打ち欠いて製作されたものと考えられ、周囲には磨滅痕がみられる。これら pit 等からの出土遺物の他に土製の模造鏡などが採集されているので、その実測図を掲げておく。この土製模造鏡は、これらの土器群に共伴するものと考えられる。

第8図 外溝断面実測図



## (2) 環濠住居跡

戊遺跡A地点は、古墳時代初頭の生活址を破壊した上に環濠住居遺構が形成されたものと推察される。

### Ⅰ 遺構

**外溝**：ほぼ南北に計画された幅10mの排水路に沿って、上面幅5.5m・深さ75cmの断面V字状の溝（第1SN溝）が存在する。この溝は第1EW溝と交叉して上面幅を5mに縮め南方に走っている。しかし、第1EW溝より南30m地点でこの溝を確認できなかつたのでその間において溝は絶続しているものと考えられる。

また、第1EW溝から北方70m地点では上面幅5.5m、100m地点では上面幅5.5mの溝を確認することができた。しかしこの北方20m地点ではこの溝を確認することができなかつた。

この溝は110m程度の長さをもつ直線に延びた溝であろうと推察される。この溝の南端近くに西に走る溝が存在している。この溝は第1NS溝と交叉するが東には延びていないう。この溝は上面幅3.2m・深さ74cmを測り、断面はV字状を呈している。

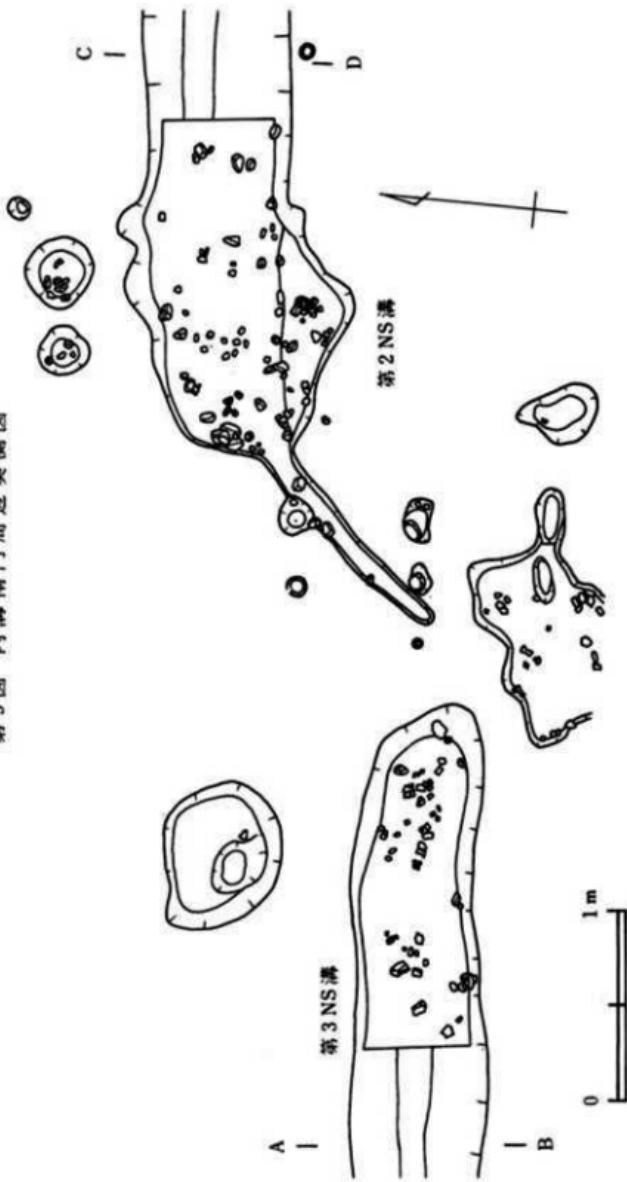
この第1EW溝の北方25mには、上面幅5.5m・深さ70cmの断面V字状を呈する第2EW溝が、第1NS溝と直交して西に延びている。この溝も東には延びていなかつた。100m地点では前者と様相を異にしており、第1NS溝から西に走る溝は、第1NS溝から西南へ斜向しながら北西へ向っていることが、第1NS溝から西方10m地点のトレンチで確認された。この溝は上面幅4m・深さ70cmで断面V字状を呈する。しかし、それより、西方20m地点のトレンチではその溝を確認できなかつた。この第3EW溝は第1NS溝を穿って東側に貫通しているのであるが、その東方15m地点ではすでに溝は存在していなかつた。

これらの溝中からは、青磁・白磁および瓦器の出土をみた。

また、第1・2EW溝がどこまで西に延びているかについては調査地域外のために確認できなかつた。西方域のトレンチ探査によると、耕作土直下から「アシ」類を含む沈澱層が1.5mないし2mにおよんでいる。このことから、第1NS溝から西方90m地点より以西は沼状の低湿地であったことが推定されるのである。

**内溝**：第1NS溝の西側、第2EW溝の北側および西方の沼状地に囲まれた範囲内に隅丸方形の溝が穿たれている。この溝は南面中央部で区切られており、東部の

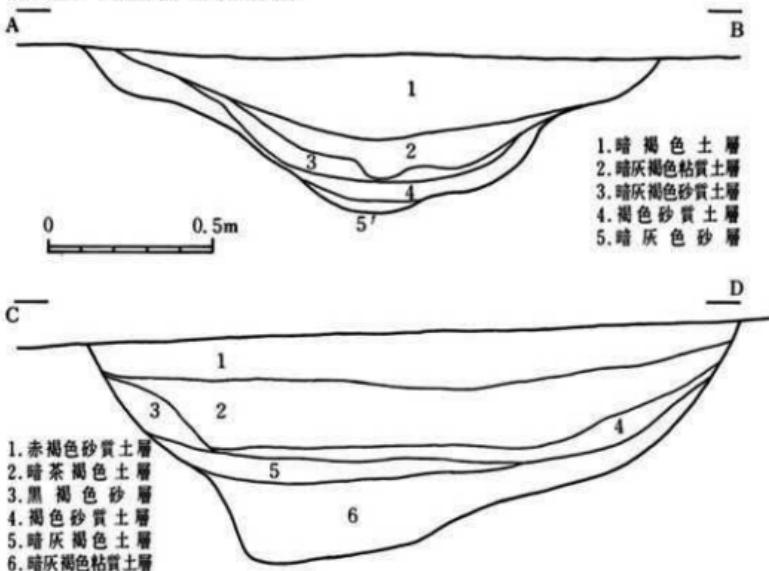
第9圖 內溝南門周邊測量圖



溝を第2NS溝といい、西部の溝を第3NS溝と称することにした。

第2NS溝は第1NS溝と約22mの距離をもって南北に平行に穿たれ、第2EW溝の北6m線にはほぼ平行に穿たれている溝であって、東南部カーブから西方へ約25m走り袋状を呈して終結している。第2NS溝の北部は明らかでないが、上面幅約

第10図・内溝断面実測図



2m・深さ60cmのU字断面を有する溝である。また、この西先端部から第3NS溝へ向け南西位に上面幅30cm・深さ6cmの小溝が約3mにわたって穿たれている。

第3NS溝は、第2NS溝と対称的に、また規模を同じくして西に向けて穿たれている溝であるが、それより以西については明かにすることはできなかった。

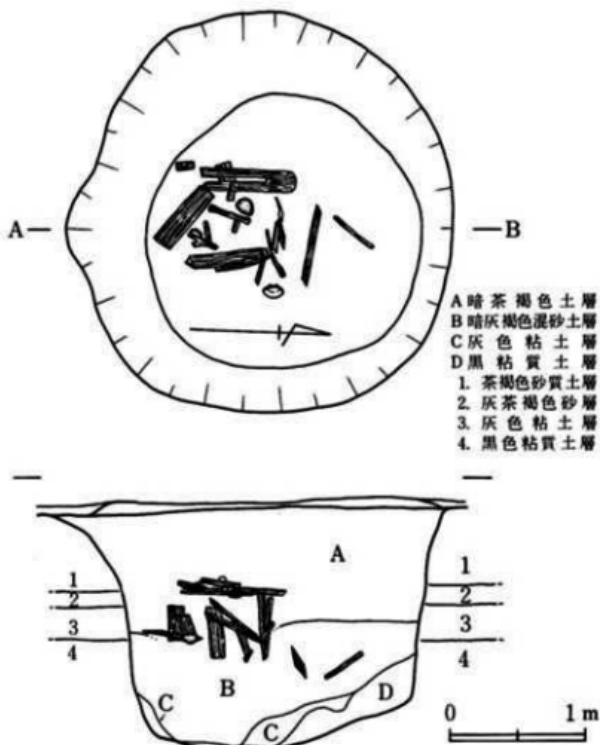
第2NS溝と第3NS溝との約4mの陸橋部はこれらの溝に囲まれた家屋の南門に相当すると推察されるのであるが、門址等の遺構を確認することはできなかった。

**家屋址:**これらの溝に囲まれた地域内には、無数のpitと井戸址がある。

pit群の中には、掘立柱の柱穴と推定されるもの、礎石を敷いた柱穴の他に不明pitが多いが、数棟の建物があり、しかも建て替えが行われていることも判明する。しかし、その実数については明らかにすることはできなかった。

南門址と推定される所からほぼ北へ30m地点に井戸址がある。上面直径2.8mの

第11図 井戸址実測図

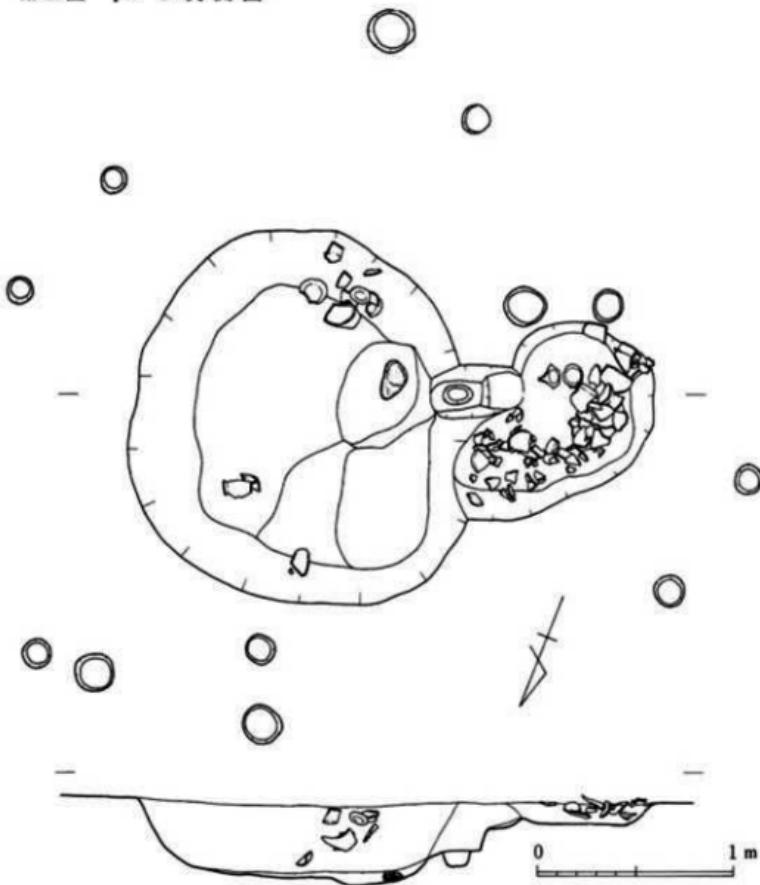


円形プランで深さ 1.8m に掘り下げた後、このほぼ中央部に一辺70cm程度の方形の井戸枠を設けているものと考えられる。上部構造は削平のため不明であるが、枠板（幅15cm・厚さ 0.8cm）を縦に並べて仕切っていることは注目される。この井戸址から白磁・青磁器を出土した。

南門址と推定される場所から北西15m 地点に直径 1.9m を測る円形プランの竪穴(P 3)がある。深さ35cmで船底状の断面をもっている。この南部に土器群がある。碗形土器・皿形土器および壺形土器などが出土地した。

このP 3 に西接して長径 1.2m を測る卵形プランの土器溜(P 4)がある。斐形土器・鉢形土器などを出土する。

第12図 pit 3 実測図



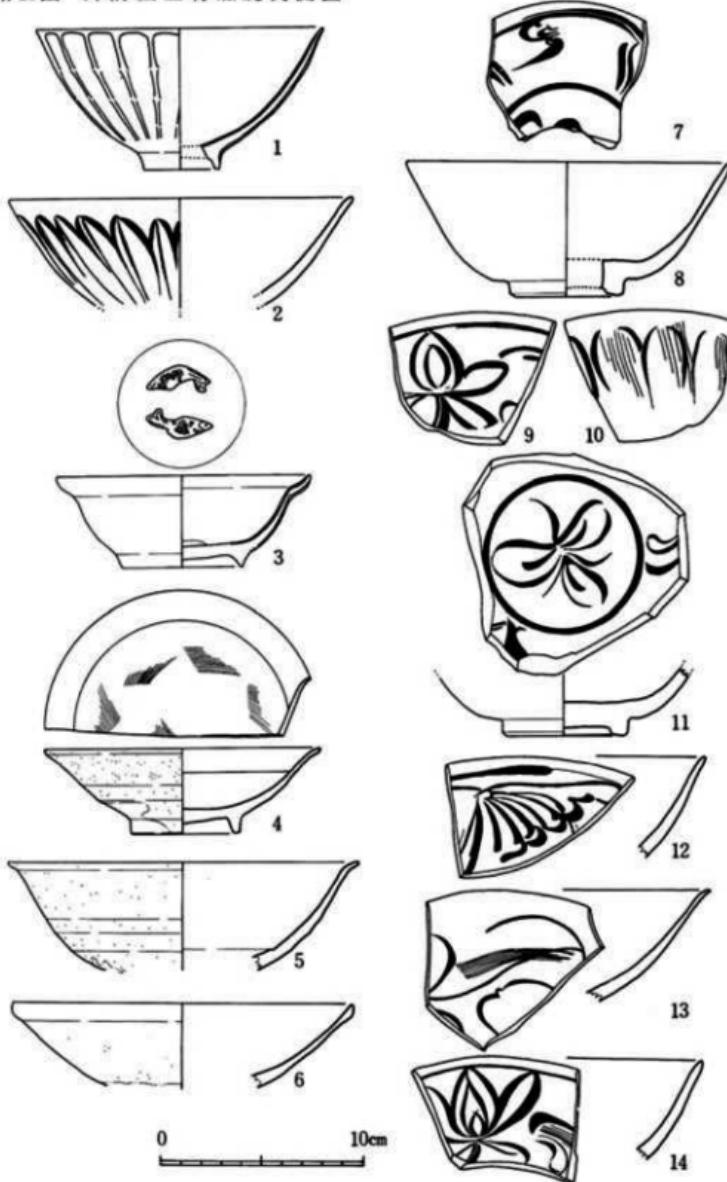
## II 遺 物

これの遺構に関する出土遺物は、外溝と内溝・井戸址およびpit 3出土の磁器・瓦器・土師器系土器および石骨石製品がある。

### 外溝出土遺物

1. 口径14.3cm・高さ 6.9cmを測る磁器の茶碗であって、口縁部はやや外反気味で、身が深く均齊のとれた形態を呈する。口縁部から高台にいたる器体外面には花弁を疑した剣先文様を付している。器体は内外とも緑白色を呈し、釉が比較的厚い。

第13図 外溝出土青磁碗実測図



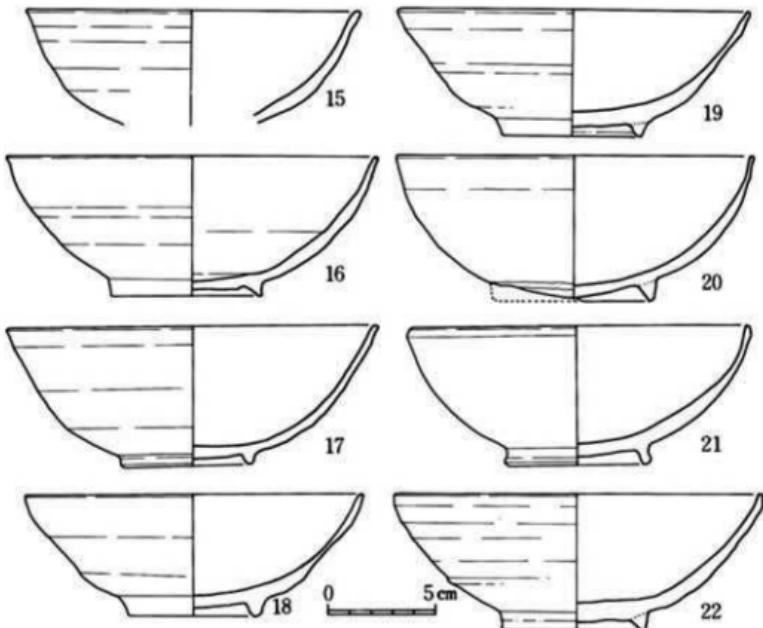
3. 口径12.6cmのうぐいす色を呈する青磁碗であって、内側中央に2匹の魚形をレリーフしている。口縁は広縁形を呈する。

4. 口径13.7cm。緑白色を呈する青磁碗で縁は外反を呈する。内形には13ないし15本の櫛目文を5・6ヶ所縁に向けて軽いタッチでデザインしている。釉のかかりが極めて薄く、外面はそのために気泡孔が多く、釉のかからない部分が底部にあって黄白色を呈している。

8~14. 青磁碗であって内側に花模様をデザインしている。全般的に暗い緑色を呈する。

15. 口径15.6cmを測る瓦器碗であって、外側は暗灰色・内側は黒色を呈する。胎土

第14図 外溝出土瓦器実測図



中にほとんど砂質を含有していない。口縁部はやや外反するが、肉厚であるところが特色である。

16. 口径17.3cm・高さ 6.5cmを測る瓦器である。器体はやや青味がかった暗灰色と白味がかった灰色が水平位に帯状に交互に連なって模様化され様相を呈する。胎

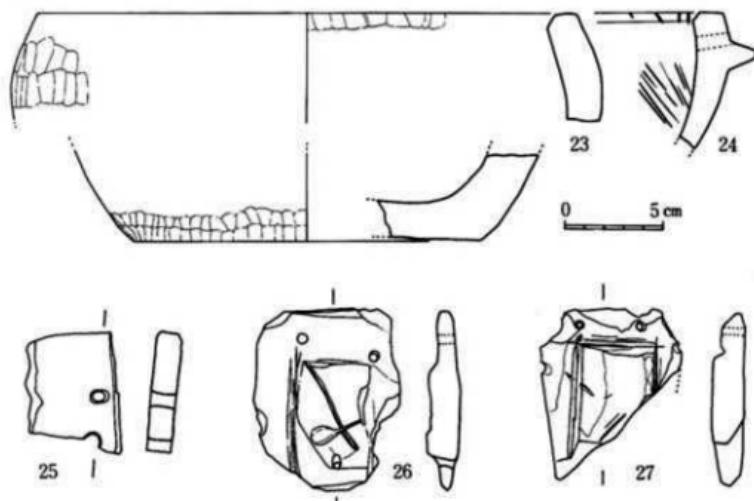
土に細砂粒を若干含み焼成も良好である。この器体はまず底部および高台を作製した後に、高台より上部を作ったものと考えられる。

17. 口径17.3cmを測る瓦器である。口縁部付近は暗灰色を帯びるが底部に下るに従って明るい灰色となるが全体的に褐色味を帯びている。胎土は精選された砂粒を若干含むが焼成も良い。この器体は、まず碗部を製作した後に高台部を張り付けている。この製作が終了した後、この器は板に乗せて自然乾燥させられたものと考えられるのであって、高台底部に板目が付着している。

23. 滑石製であって石鍋の破片と考えられ、口縁部と底部とが残存している。腹部に3cm幅の削痕がみられるが、突帯(鉗)を削り取った痕と考えられ、この突帯の下部から底部にかけて煤が付着している。

24. 滑石製の石鍋の破片である。突帯の上辺に接して径0.7cmの穴を穿ちこの穴に鉄棒が挿入されており把手であろうか。突帯の下部には煤が付着している。

第15図 外溝出土滑石製品実測図



25. 滑石製品の破片であるが、一面に煤が付着しているところから石鍋であろうと考えられる。径0.6cm程度の穴が2個穿たれているのは把手挿入用であろうか。また、この破片の周囲は丁寧に磨研されているのであって、石鍋が破棄された後第2次的目的で加工されたものと考えられる。

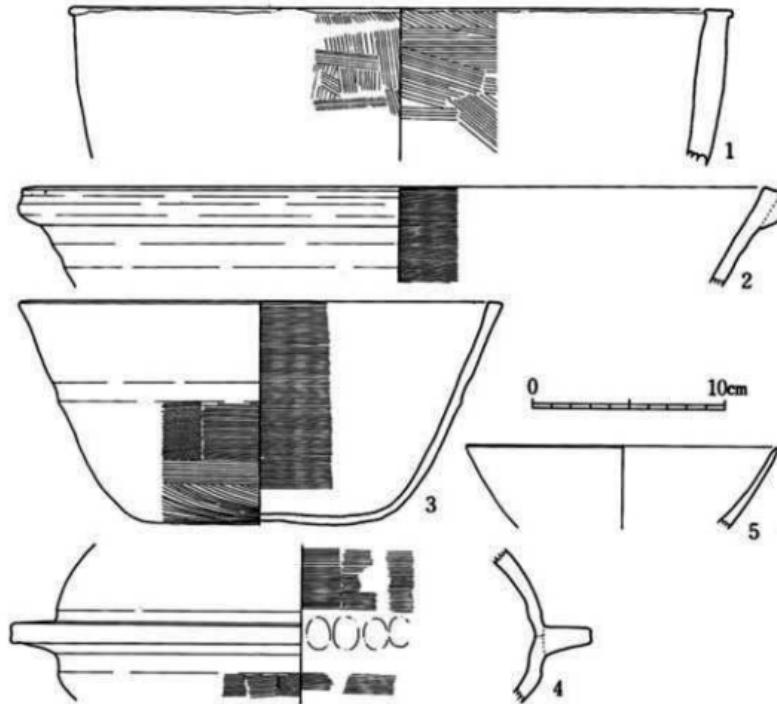
27. 清石製品の破片である。煤が所々に付着しているので石鍋であろう。径 0.4cm の穴を 2 箇穿ち、その下部に四角形状の飾り彫りが施されている。この石の割口にも磨研が施されており、第 2 次的用途が考えられる。

#### 内溝出土遺物

1. 口縁径 34.5cm を測る鉢形土器であろうか。1.3~1.5cm を測る肉厚の器体であって、口縁部は内外に一寸押し出して縁どりをしている。器体の外側は多方向に走る短い刷毛目を付し、内外はやや長めの横を主体とする刷毛目を施して調整している。胎土に砂粒を含み焼成もよく茶褐色を呈する。

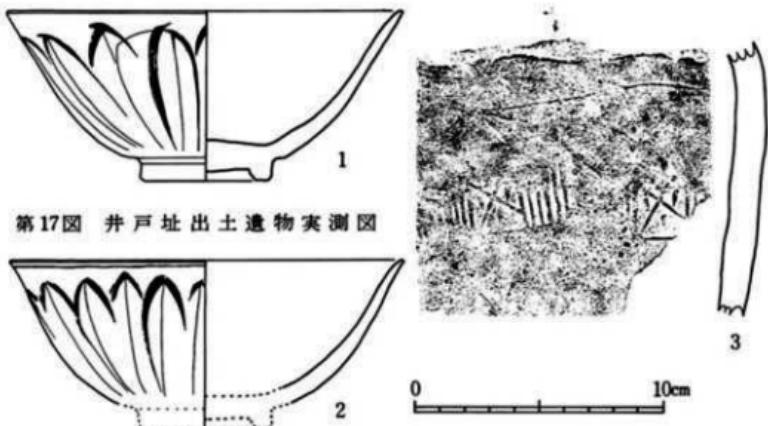
2. 口縁径 39.5cm を測る鉢形土器の口縁部である。口縁部の外側に突帯を張りつけてその上面を横に撫でて調整し、内側は細い刷毛目を横位に付している。突帯の頂部から下部の器体に煤の付着がみられる。

第16図 内溝出土遺物実測図



3. 口縁径25cm・高さ11.6cmの鉢形土器である。煮沸に用いられた土器であって外面には煤が付着している。内面は全体に横刷毛を施し、外面は胸部より下位に横を主体とする刷毛目痕を残しており焼成もよく茶褐色（内側）を呈する。
4. 最大径30cmの鍋形土器である。器体の製作が終って、突帯（鉄）を押圧して付している。器体の外面はほとんど撫でによる調整を行い、内側は横位の刷毛による調整を施している。焼成も良好で黄褐色を呈する。
5. 灰緑色を呈する青磁碗であって無紋である。

#### 井戸址出土遺物



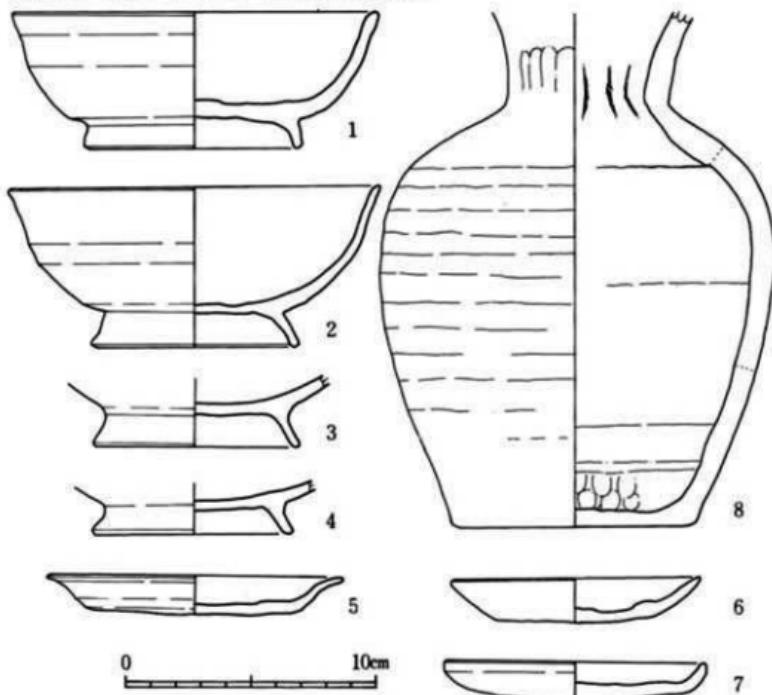
第17図 井戸址出土遺物実測図

1. 口縁径16cm・高さ 6.9cmのやや灰色を帯びる青磁碗である。器体の外面には蓮花紋を模した劍先文様を付している。
3. 須恵器質の陶質土器片であって、相当大型の器体になるようで、火入れ・火鉢類ではないかと推察される。器体の外面には折形の中に米印を入れ、その左右に縦5条の凹をもつ形で押印している。

#### 豊穴（P 3）出土遺物

1. 口縁径14.8cm・高さ 5.5cmを測る土師系土器の碗である。精選された胎土に微細な砂を含み焼成良好であって淡黄褐色を呈するが、底部裏面は黒色である。
5. 口縁径11.9cmの皿形土器である。口縁部は外側に大きく開いており、縁反形を

第18図 穫穴 (P 3) 出土土器実測図



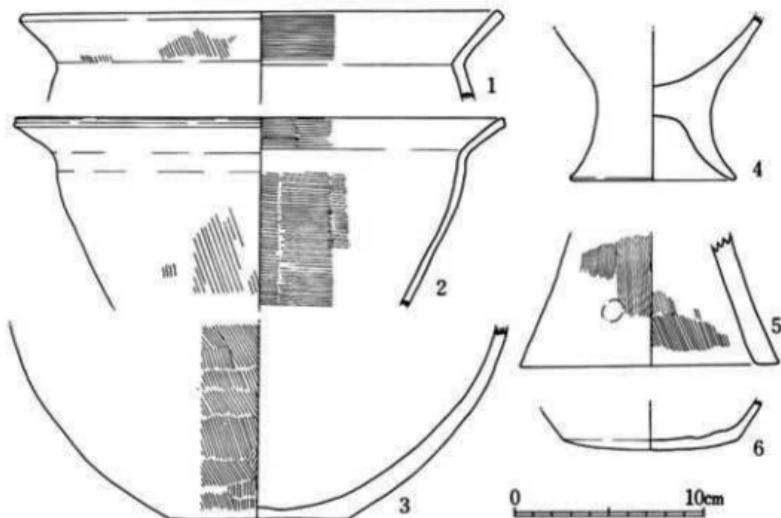
呈する。全体的に褐色であるが、上部は黄褐色・底部は灰褐色である。

7. 線菱形を呈する口縁をもち、外側部分は箆で削りとられている。暗茶褐色を呈する皿形土器で口縁径10.6cmである。
8. 土師器系の赤褐色を呈する壺形土器であって、紐状の粘土を輪積みにして作製されている。底部は平底であり、やや肩に張りを見せ、頸部は鋭く紋されている。口縁部を欠くが広口状の口縁部をもつものと推察される。肩部および頸部に撫による整形がみられる。胎土に砂と砂粒を若干含み焼成も良好である。

#### 小竪穴 (P 4) 出土遺物

1. 口縁径25.6cmの壺形土器の口縁部であろうか。く字状に外反する口縁部であって内側には横の刷毛目痕があり、外側には斜位の刷毛目を所々に短く施している。胎土に砂粒を多量に含み焼成良好であって茶褐色を呈する。

第19図 小豎穴（P 4）出土土器実測図



2. 口縁径26cmの鉢形土器であって黄褐色を呈する。く字状に外反する口縁部をもっている。口縁部の内側は横に走る刷毛目。頸部は横撫・胴部は横の刷毛目痕を有する。外側は、口縁部から肩部までが横撫・その下部は目の広い刷毛で斜位に調整している。

### (3) 窯跡

戊遺跡A地点の調査範囲内に少くとも5基の窯跡を確認することができた。

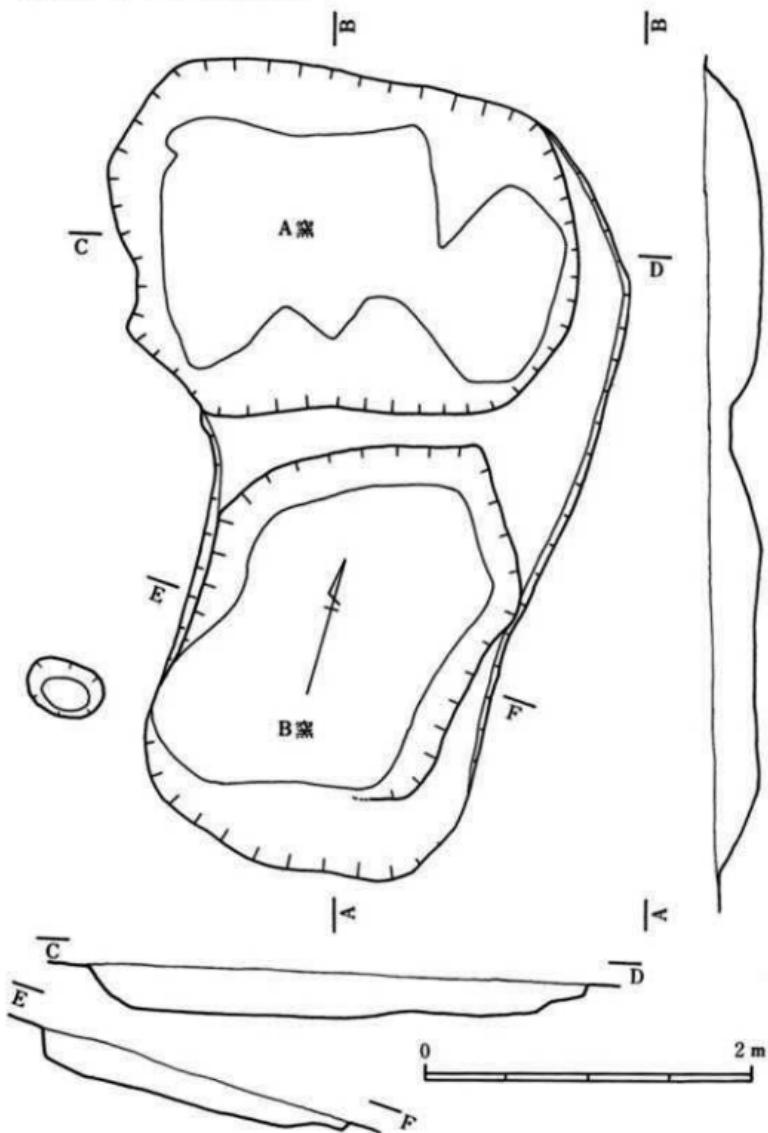
#### I 遺構

第1NS溝西側で第2EW溝の南側に2基、第2EW溝上面に1基、井戸址の上部に1基および井戸址の北端に接して1基の併せて5基である。これらの窯跡はその構造が極似していることが特徴である。すなわち、上面径約2m余の円形プランを呈し、深さ25cm程度の浅いU字断面をもっている。

A. 窯址：第2EW溝の南2.5m・第1NS溝の西2mに位置する窯跡である。上面径東西3.25m・南北2mを測る不整卵形を呈し、深さ28cmの浅い船底状を呈する。この中には皿形土器を内蔵しており、カーボン・鉄屑および支柱を出土した。

B. 窯址：A窯址に南接する窯であって上面東西径2m・南北2.7mの変形隅丸

第20図 A・B 窯実測図



方形を呈する。深さ22cmを測り浅い船底状を呈する。この窯から皿形土器の出土をみた。

D. 窯 址：井戸址の上部に造られた窯跡であって、上面径東西1.8m・南北2mを測る橢円形を呈し、深さ15cmの浅い皿状を呈する床をもっている。この窯も皿形土器を出土した。

第21図 A 窯址出土土器実測図

## II 遺 物

土器はどの窯においても一般的に小形・中形に分類できる皿形土器であって、底部には糸切・板目文をもっているものが多く、黄褐色を呈する土師器系土器である。

### A 窯址出土土器

1. 口縁部径8.9cmの小皿である。口縁内側から内側底にかけてゆるやかな曲線を描いており、肉厚の器体である。底部は糸切底である。
2. 焼成時に弯曲したものと考えられるものであるが製作は1と同様である。口縁径8.7cm、底部は糸切底である。
3. 口縁径9.1cmの肉厚で、身の浅い形態であることは1と同様である。底部は糸切底である。
4. 口縁径15.4cmを測る淡黃白色を呈する土師系皿形土器である。前者に比して肉薄で身が深い。胎土に若干の細砂を含み焼成良好であって、底部は糸切底の後板目がある。

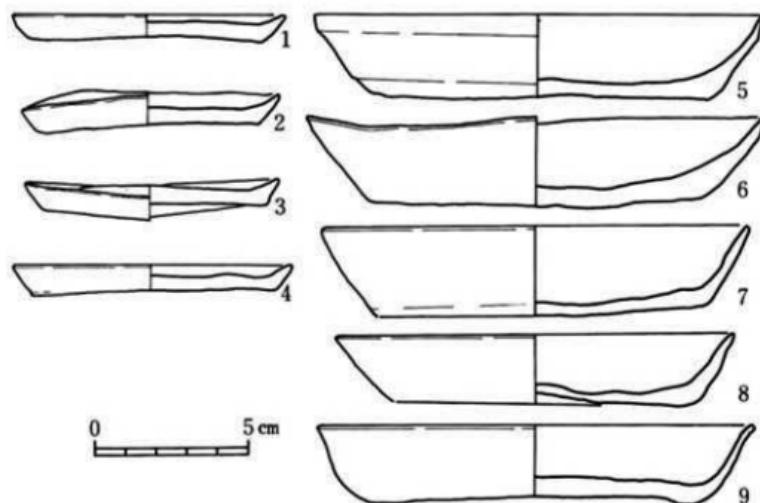
### B 窯出土土器

1. 口縁径9cm、肉厚で身の浅い皿形土器であって灰茶褐色を呈する。やや上底であるが焼成時の弯曲と考えられる。糸切底である、胎土に細砂を含み焼成良好である。
4. 黄褐色を呈する皿形土器であって、口縁径9.2cmを測る肉厚の身が浅い土器であって、糸切底である。
5. 口縁径14.9cmを測る皿形土器であって茶褐色を呈する。前者に比して肉薄で身

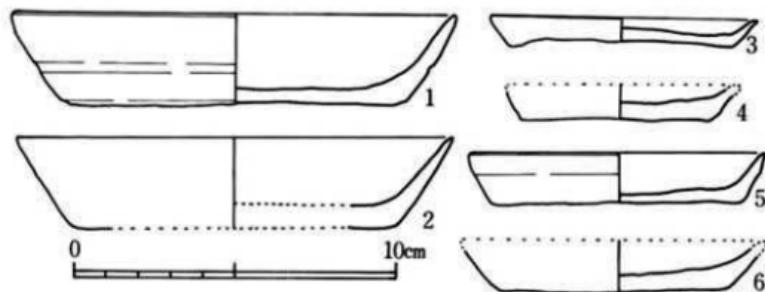
が深い。底部は糸切底である。胎土に極めて細い砂粒が多量に含まれているが焼成は良い。

8. 茶褐色を呈する皿形土器であって焼成時の弯曲がある。底部は糸切底、後板の上で自然乾燥させたものと思われる板目が付いている。

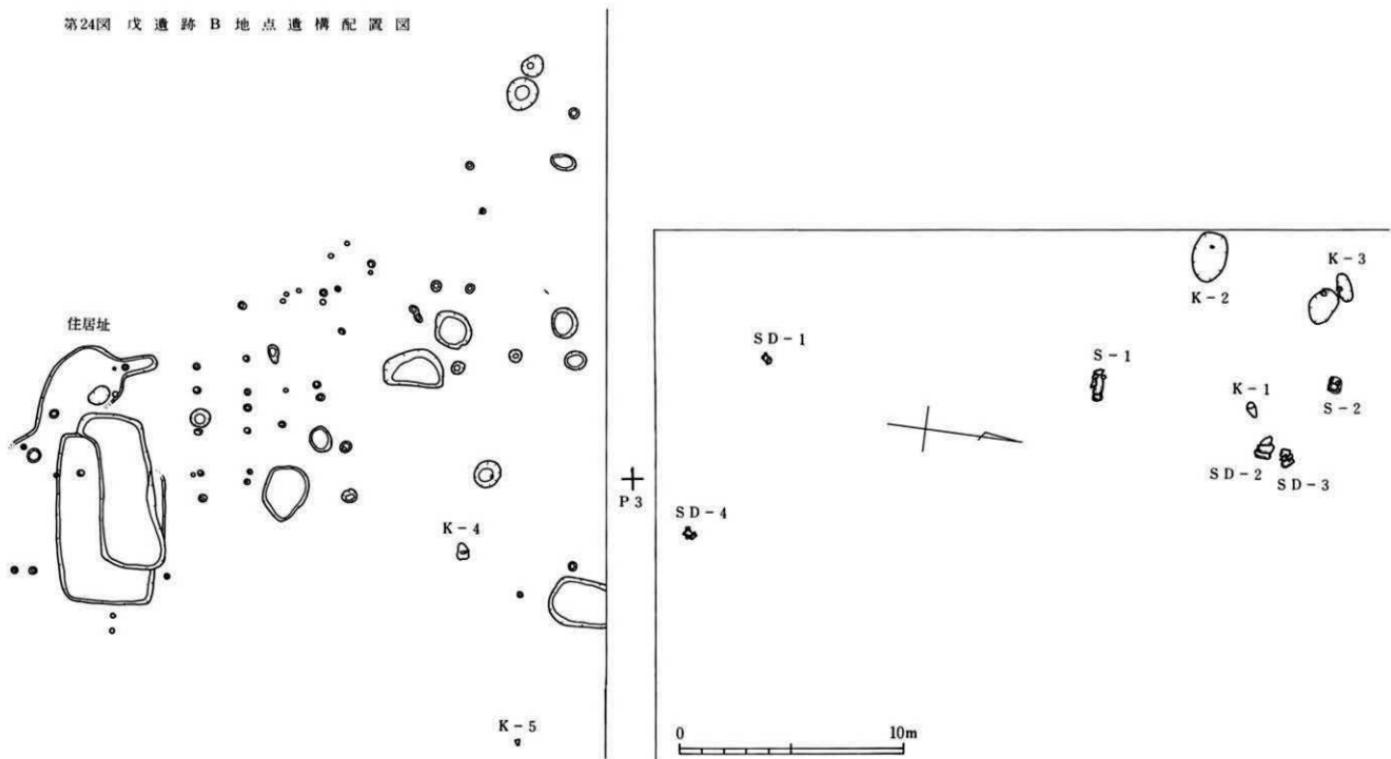
第22図 B 窯址出土土器実測図



第23図 D 窯址出土土器実測図



第24図 戊 通路 B 地点造構配置図



## 2. 戻遺跡B地点

戻遺跡B地点は戻部落の「きっちょうさん」(神社)から北西 220m 地点の水田面よりやや高い畠地（標高12.5m）である。この地点からは、墳墓群と竪穴住居址および多数のpitが確認された。

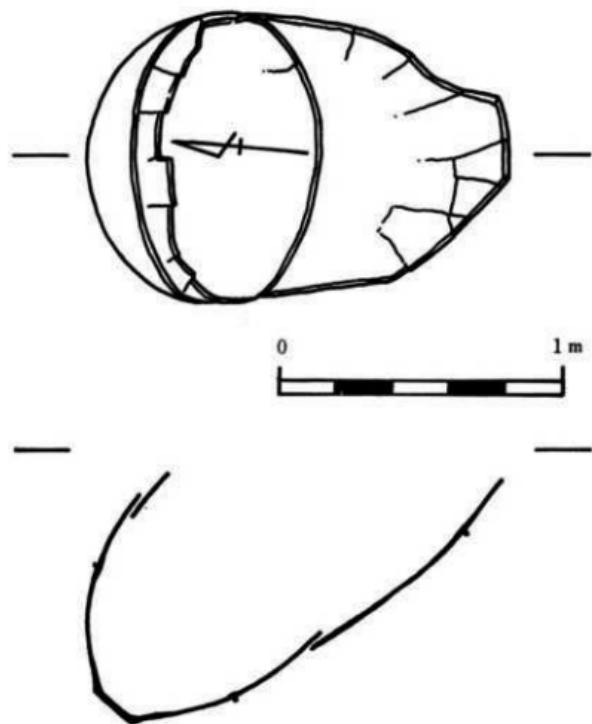
### (1) 墳 墓

戻遺跡B地点の北部に破壊された甕棺墓・石棺墓および石蓋土壙墓が交錯して埋置されていた。調査区の北部に甕棺1・箱式石棺2・石蓋土壙2基が一群をなして確認されたが、他はその南方に点在する。

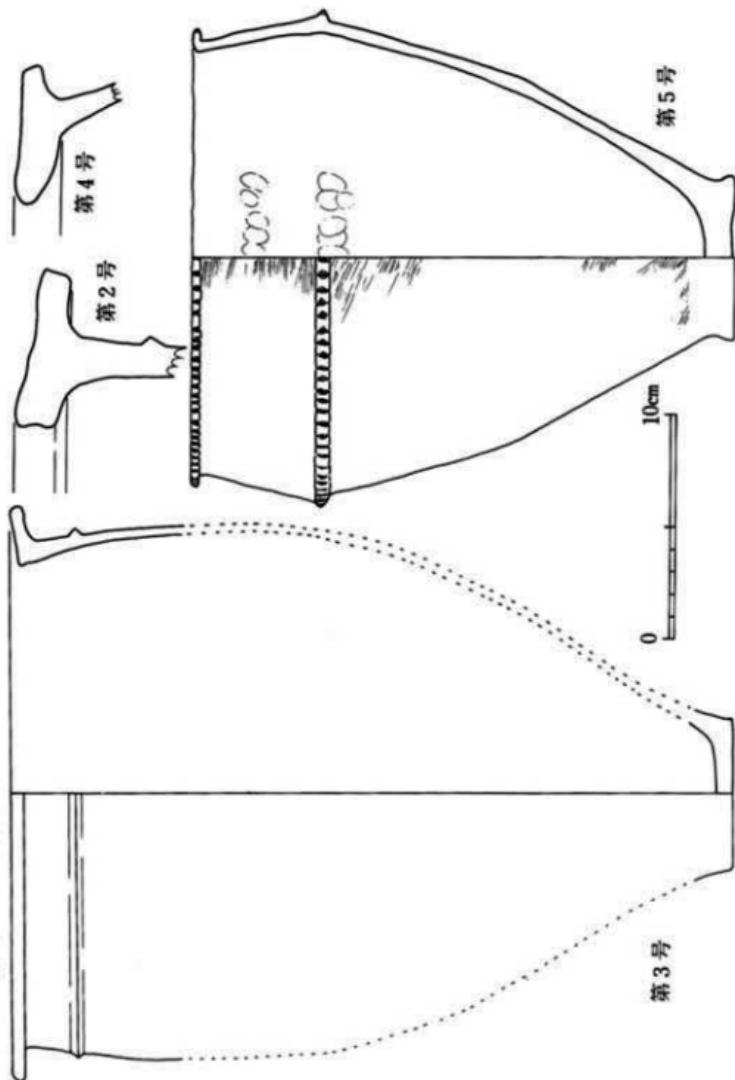
#### | 甕 棺 墓

5基の甕棺墓が確認されたが、その大半が削平破壊されており、第1号墓を除い

第25図 第1号甕棺墓実測図



第26圖 婷形土器実測図



てその所在が僅かに判明する程度であった。

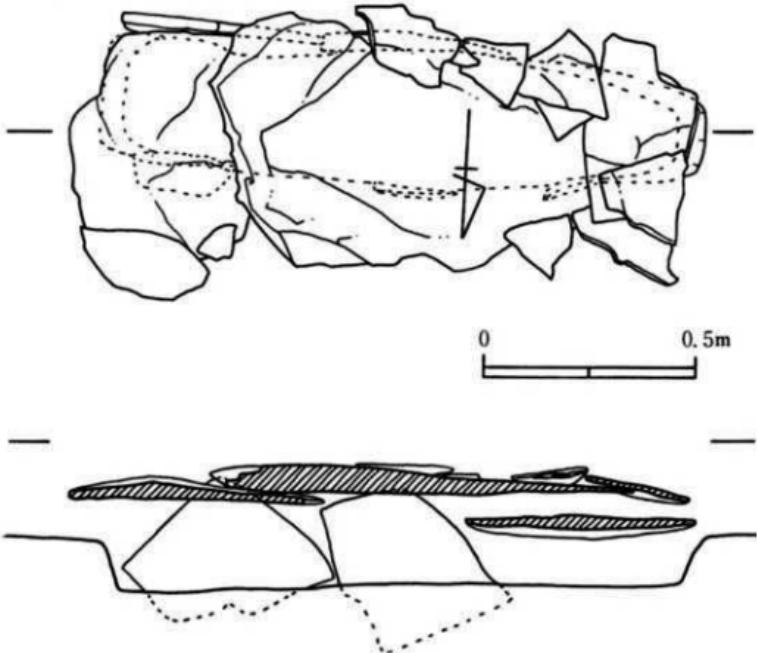
第1号墓は、第2号石蓋土壙墓に西接して埋置されており、胴部より上部が破壊されている。上・下蓋ともに口縁部を打ち欠いた合口による埋葬形態をとっている。下蓋が上蓋より大きいことが注目される。接合部の粘土は認められなかった。

第5号甕棺墓もその構造は不明である。復原された甕形土器は、口縁部径20.5cm・高さ24.3cmを測る。直角に外反する幅の狭い口縁部をもち、刻目を付している。胴部の重心が上位にあってその凸帯には刻目を付している。凸帯から暫次幅を狭めながら底部へと至っている。胎土に小砂粒を含み焼成は良好である。一見、夜臼式土器を起想させられるが弥生時代前期に遡ることはないと推察される。

## II 箱式石棺墓

第1号箱式石棺墓：第1号甕棺墓の南7mに位置し、長軸はほぼ東西位をとっている。石蓋は4枚の大形板石を東側から西側へ覆い、南北部を数枚の小形板石で覆って補足している。粘土による目張りは確認できなかった。石蓋の長軸は1.45m・幅

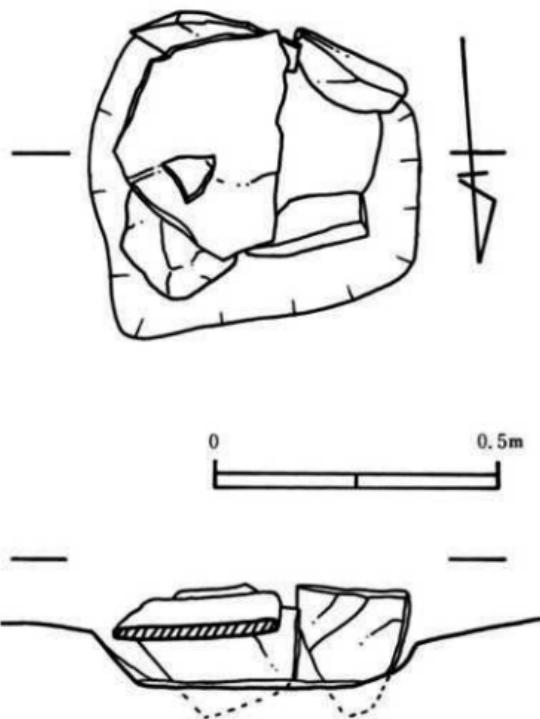
第27図 第1号箱式石棺墓実測図



60cmを測る。側壁の東西部には板石が用いられておらず、また南壁が2枚・北壁には3枚の板石が使用されているのみである。主体部は長軸上面で1.42m・床面で1.3m・最大幅は32cm・深さ12cmであって、東向きに遺体を埋納したものと推察される。

第2号箱式石棺墓：第1号石棺墓の北10m地点にあって、第1号甕棺墓および石蓋土壙墓第2・3号墓の北側に隣接する位置に所在する小形の箱式石棺墓である。

第28図 第2号箱式石棺墓実測図

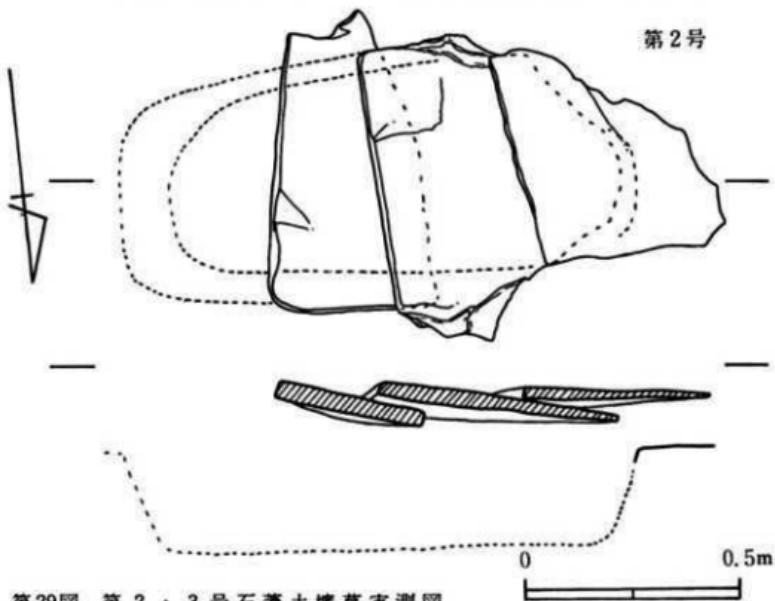


### III 石蓋土壙墓

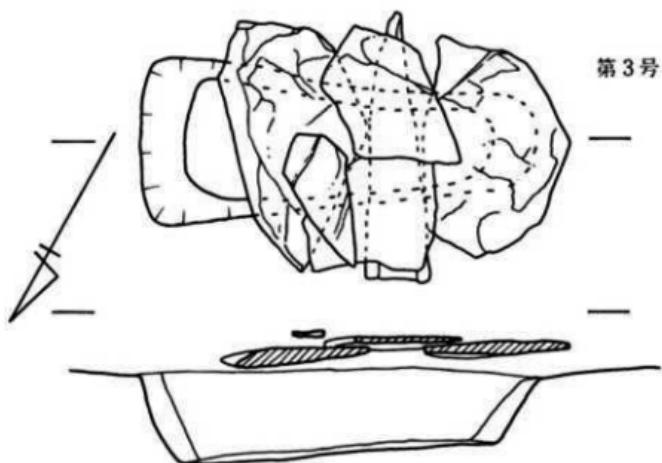
第2号石蓋土壙墓：第1号甕棺墓の北東に隣して第2・3号石蓋土壙墓がある。蓋石は3枚（本来は4枚）の大形板石を東側から西側へと重ねながら構成されている。主体部である土壙はその境界がはっきりしないが、長軸上面で1.2m・床面で1.05程度、深さ25cmであろうと考えられる。主軸は北83度西寄りである。

第3号石蓋土壙墓：第2号墓の北に接し主軸を北94度西寄りであって、遺体の頭部

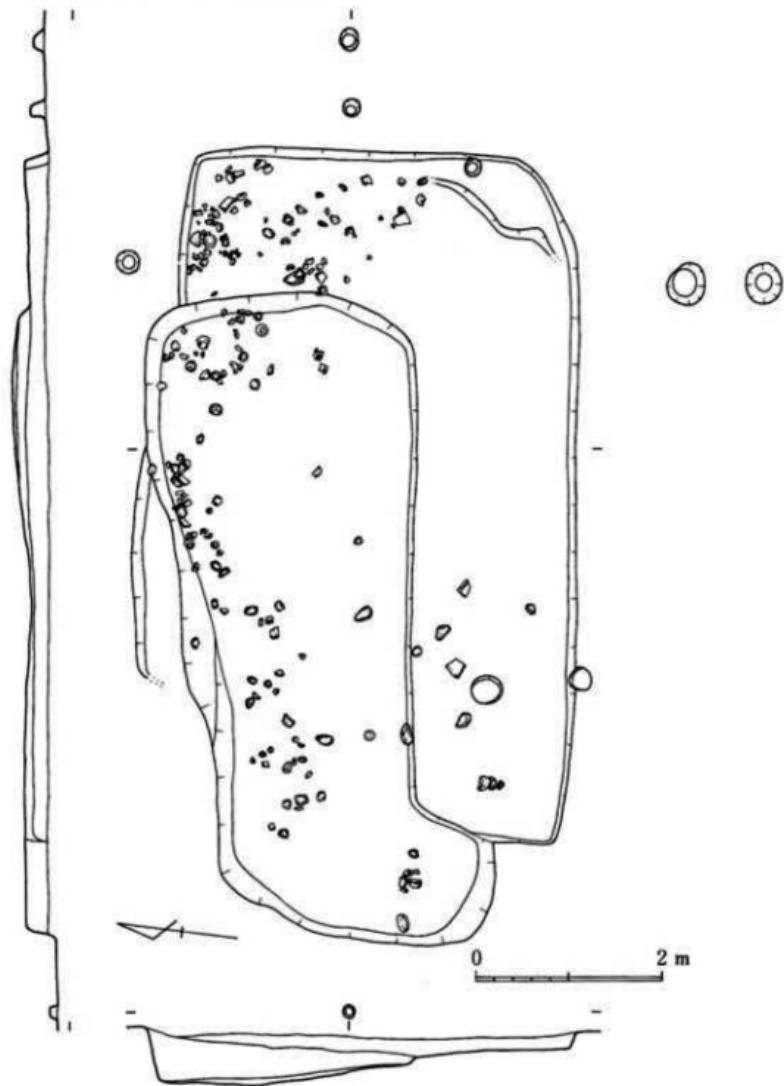
は東方向に向けられている。2枚（本来は3枚）の大形板石を並べ、その間隙を小板石で補足しながら覆う形態をとっている。土壤の長軸上面で0.93m・床面で0.75m・深さ20cmを測る。東部の幅が広く西部が狭い。ともに出土遺物はない。



第29図 第2・3号石蓋土壤墓実測図



第30図 穂穴住居址実測図



## (2) 壁穴住居跡

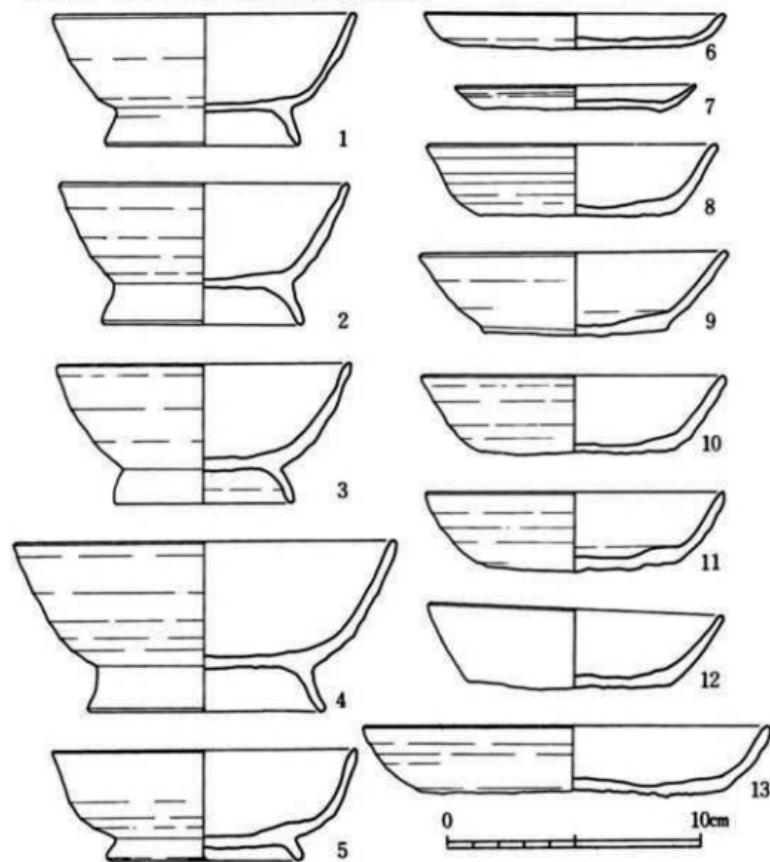
### I 造 構

C地点南部に長径約8mを測る長方形を呈する壁穴址が存在する。この壁穴址は2つの部分から構成されている。即ち東西7.3m・幅1.7m、南北2.5m・幅1.5mのL字状を呈する部分と、それから更に10cm程度掘り下げた部分がある。後者は前者の北側に連続し東西6.7m、幅は東部で2.7m・中央部で2.1mを測り、西部では南側に屈曲して袋状に終わっている。この造構から炉址・カマド址等を確認することはなかった。前者の造構の東北側および後者の造構のおもに北側を中心にして遺物が出土する。遺物には土師器系碗形土器および皿形土器がある。これらの土器に前者の造構と後者の造構とに差は見られない。このことから、この両者の造構は同時期のものと推察される。この造構は一応住居址と推定し、L字状造構はベッド、下面は生活面としておくが、類似造構の発見を待った上で再検討を加えたい。

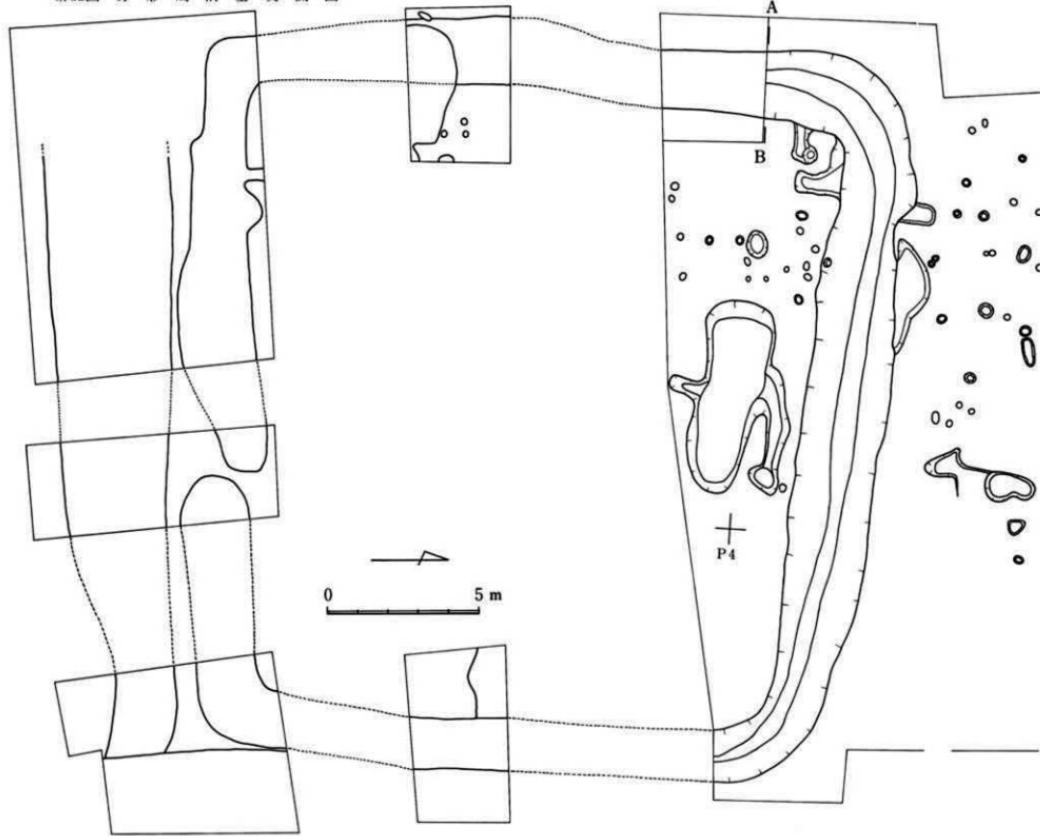
### II 遺 物

1. 黄褐色を呈する碗形土器である。口縁径12cm・高さ5.2cm。精選された粘土に少量の微細な砂を混入した胎土であって焼成も良好である。まず、輪轆による主体部が製作が行われついで器体は撫でによる調整を行った後に口縁上部を水平に窓でカットし、ついで外部を斜めにカットして口縁部を整形している。この後板に乗せ乾燥を待ったうえで高台部を付着するという製作過程であろう。
5. 口縁径12cm・高さ4.3cmの黒色磨研の碗形土器である。胎土は精選された粘土で砂質をほとんど含まず、焼成もかなり良好である。内外とも高台の付着部分より上位は窓による磨研が施され、底部内側は撫で裏側には輪轆痕をとどめている。
6. 口縁径12cmを測る黒色磨研の皿形土器である。胎土に微細砂粒を若干含んでおり焼成も良い。器体の内外は窓による磨研がなされている。
8. 口縁径9.5cmで身の浅い皿形土器である。胎土に微細砂粒を含むが焼成はよく黄褐色を呈する。器体の内側および外側は撫で調整、底部裏面には糸切痕と板目痕を残している。
9. 口縁径11.5cmを測る皿形土器である。砂粒を含む胎土であって焼成は良く、くすんだ黄褐色を呈する。底部裏面には板目が付着している。

第31図 穀穴住居址出土土器実測図



第32図 方形周溝墓実測図



### 3. 戊遺跡C地点

俗称「きっちょうさん」から北北東約150m地点が戊遺跡C地点(標高12.11m)である。

C地点では方形周溝墓1基を確認調査したが、この周溝の東・西および南の各溝は今回の圃場整備事業では破壊されないとこから将来を期すこととして、北溝の発掘調査と周溝の平面プランを確認するにとどめた。

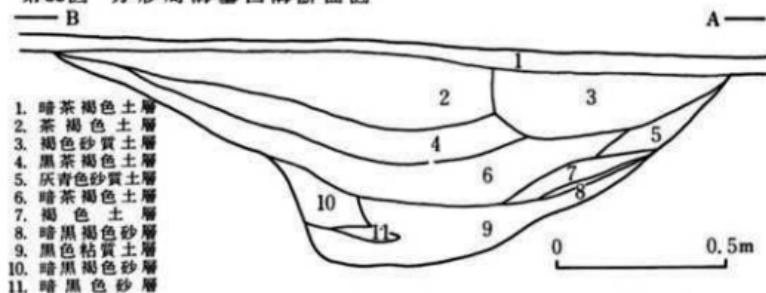
#### (1) 方形周溝墓

##### I 造 構

戊C地点の北部はpit群があるがそれが柱穴であるのかその性格を明確にし難い。この一つのpit内から宋銭が検出されているので、その年代をほぼ推定することができる。

方形周溝墓はC地点の南部にあって、陸橋を南に向けて築造されている。方形台状部は南北20.2m・東西20.8mを測る隅丸方形を呈し、周溝の上面幅は最大2.8m・最小1.5mであって、弯曲部が狭くなり溝の中央部が最大幅となっている。発掘を完了した北溝では、上面幅2.8m・深さ70cmを測りゆるやかなV字状断面を呈する。

第33図 方形周溝墓西溝断面図



台状部側の壁面は上部からゆるやかに下降し、途中から急激に下降して底部に至っている。南部の陸橋部は約40cmの狭い陸橋を形成している。

調査を完了した北溝の中には夥しい量の土器が溝内から溝遍無く出土した。壺・甕・器台・高環・瓶およびミニチュアの土器など多様であった。

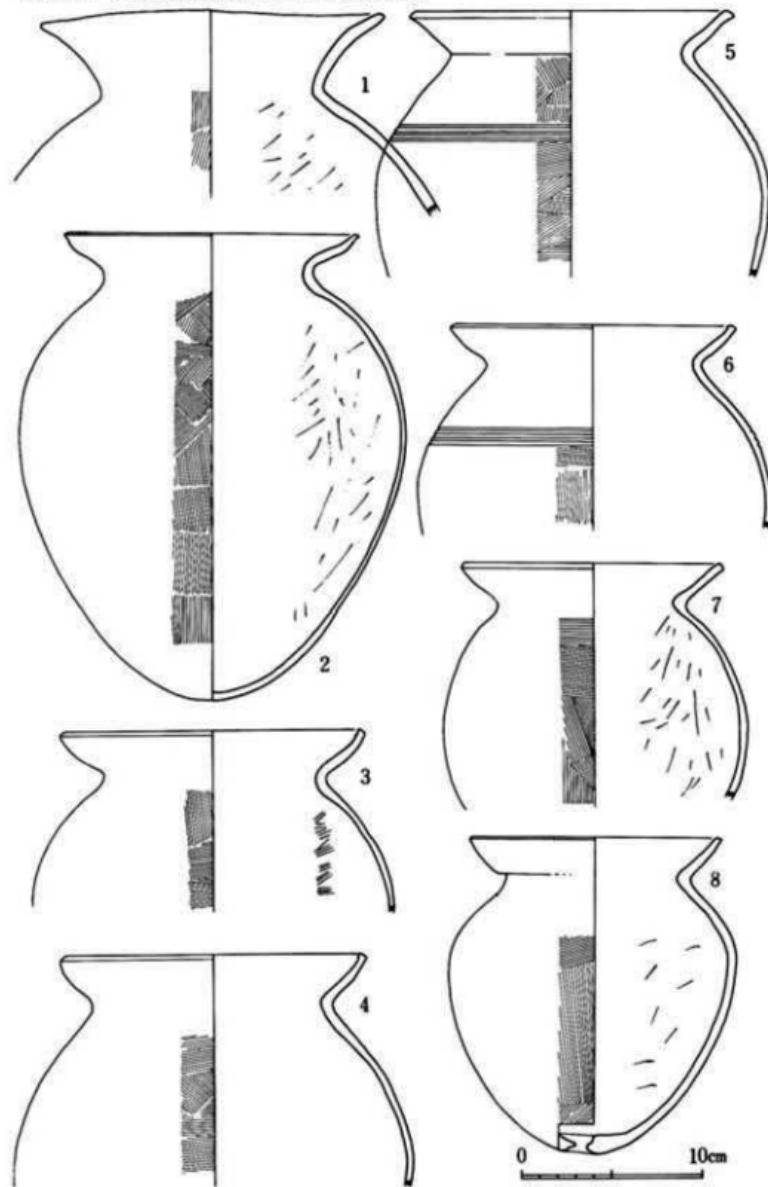
なお、土器の堆積状態は、北溝東部においては床面に、中部から西部にかけては溝底から10cm程度上が土器群の最下位である。また土器の密度は北溝の中央部が特に高く曲部に近づくに従ってやや土器量を減ずる傾向がみられた。

## Ⅱ 遺 物

### 壺形土器

1. 壺形土器の口辺部である。口縁径19.1cmを測り、頸部からく字状に外反しさらにラッパ状に聞く口縁部をもつ土器であって、粘土も精選されており、砂粒を含む胎土で、成焼も良く赤黄褐色を呈する。この土器は、球状を呈する胴部に小さな平底が付される器形であろうと推察される。
2. この遺跡のテピカルな器形をもつ壺形土器であって、卵形の胴部にやや尖る底部をもち、口辺部は鋭くく字状に外反しながら稜をもつかのごとく上方へカーブしている。口縁は窪でカットする手法をとっている。口辺部は横撫による調整、頸部から胴部にかけては斜位に交叉する短かい刷毛目を付し、その下部から底部にかけては縦に長い刷毛目をもって整形している。精選された粘土に少々の砂粒が含まれ、肉薄の器体で焼成も良く黄褐色を呈する。また胴から下位には煤が付着している。口縁径16.5cm・器高25.8cm。
3. 球状を呈する胴部にく字状に外反する口辺部をもち、やや上部にカーブしながら口縁に至っている。口縁は窪でカットし、内側は鳥嘴状を呈する。口縁部の内外とも横撫で、頸部下に縦目の刷毛、肩部から胴部にかけては横位の刷毛を付して調整している。器体の内側には、目の粗い櫛目を短かく斜位に交叉させている。砂粒を含む胎土であって焼成も良く黄褐色を呈する。口縁径17cm。
5. 球状を呈する胴部にく字状に外反する口辺部をもつ壺形土器である。口縁は窪でカットされ、口縁外へやや突きでている。口辺部の内外とも横撫による調整がなされている。肩部に3条の沈線を横に平行に施し、頸部との間に縦・斜位の短かい櫛目を沈線の下部から胴部にかけて横に走る櫛目痕が付されている。また、器体の全面に煤が付着している。口縁径18cm。
6. 卵形を呈する器体であって、く字状に外反する口辺部をもつ壺形土器である。口縁は窪切りであって内側は鳥嘴状を呈する。肩部に3条の沈線が平行に横に走り、その1cm下部に2~3条の櫛目がめぐり、その下方には縦に付した長い櫛目痕がある。砂粒を含む胎土であって焼成も良く赤黄色を呈する。口縁径16cm。
8. 口縁径14cm・器高17.5cm。やや胴部が上位にある尖底の壺形土器であって黄褐色を呈する。く字状に外反する口辺部を付し、口縁は窪切りであり、口辺部は内外ともに横撫で、胴部に斜位の長い刷毛目を付し、その下部は縦に走る長い刷毛痕を、

第34図 方形周溝墓溝内出土土器実測図(1)



底部は斜位の刷毛目を施している。胴部から下部に煤が付着しており、底部は赤桃色を呈し火に焼けたことを物語っている。この土器が方形周溝内に納められる段階で、底部に穿孔（両穿孔）されきものと推察される。（完形土器）

9. 球状の胴部でやや尖る底部を有し、く字状に外反する口辺部をもつ壺形土器である。口縁は寛切りであって、内外とも横撫で手法をもつ口辺部である。肩部から胴部にかけて横・斜位の短かい刷毛目痕がある。砂粒を含む胎土であって焼成も良く黄褐色を呈する。口縁径13.9cm・器高14.5cm。

11. 口縁径11.5cm。玉葱状の胴部にやや外反する口辺部をもつ壺形土器である。砂を若干含む胎土で焼成良好であり黄褐色を呈するが、所々に赤褐色の群焼痕がある。器体の内面は全面が黒色を呈する。口辺部は内外とも横撫でで調整し、頸部より下部は横位の寛調整がなされている。また、胴部より下部に煤の付着がみられる。

13. 口縁径 9.4cm・器高10.3cmを測る完形の壺形土器である。玉葱状の胴部に尖る底部をもつ器体にく字状に外反する口辺部を付している。口辺部は稜をもち二重口縁を形成している。精選された胎土で焼成も良く赤黄色を呈する。口辺部は内外とも横撫で、胴部に斜位の刷毛目痕があり、内部には寛で所々を撫でて調整している。

### 鉢形土器

16. 口縁径11.9cm・器高8cm。胴の張りがほとんど見られない丸底の器形で、口辺部はやや外に開いている。精選された粘土に砂の微粉が含まれる胎土であって焼成も良く赤褐色を呈する。

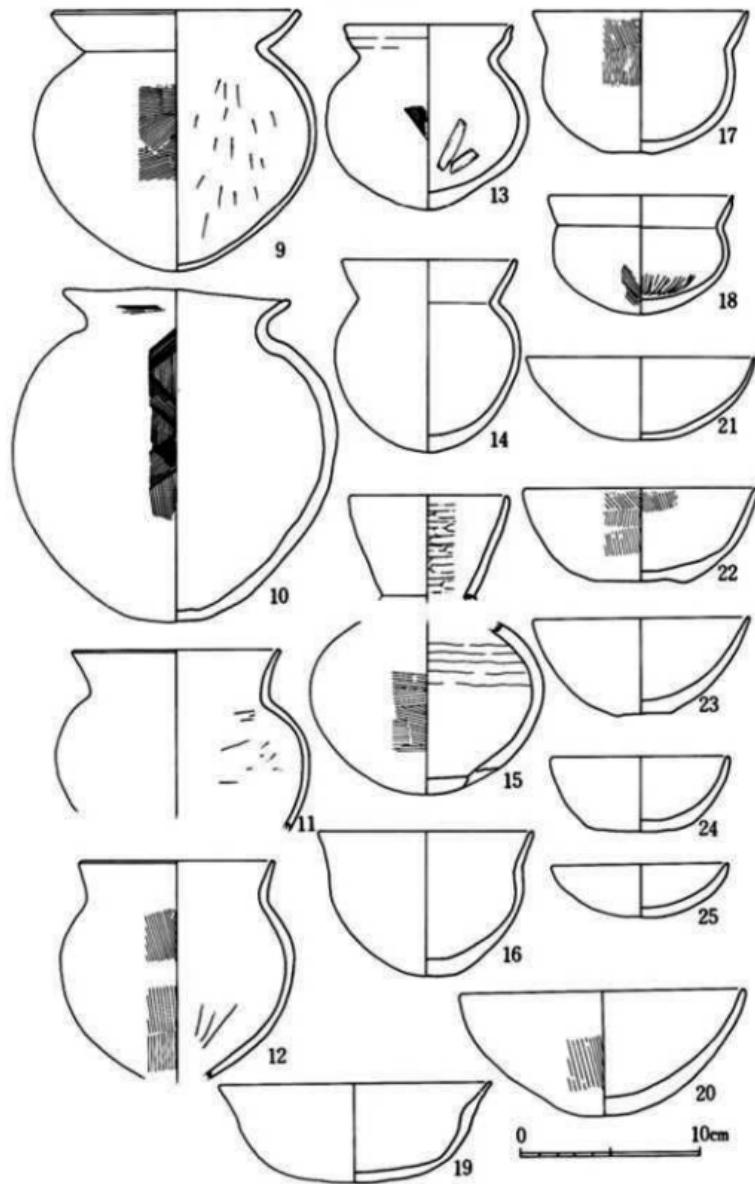
17. やや尖る底部をもつ球状の器体にく字状に外反する口辺部を付している。口辺外部は斜位の刷毛目、頸部は継の刷毛目痕を付しておらず、尖った底部を平底に仕上げている。砂を少量含む胎土であって焼成も良く、赤褐色を呈する。口縁径12cm・器高 7.9cm。

18. やや胴の張る葱状の器体にく字状の口辺部を付けている。口辺部は内外とも横撫で調整、胴部から下部には粗い斜位の刷毛目を有しており、内面は底部から胴部に向う細い寛目痕が放射状に付されている。微量の砂を含むが胎土は良好で焼成も良く赤黄色を呈する。口縁径10.3cm・器高 6.6cm。

20. 稜をもって反転せず扁球状の器体がそのまま開がり口縁を形成している。口縁外部は横撫で、胴部には粗い刷毛目が継に付されている。黄褐色を呈する。

23. 底部をカットして平底状に整形した鉢形土器であって、器体外全面に寛による磨

第35図 方形周溝墓溝内出土土器実測図(2)



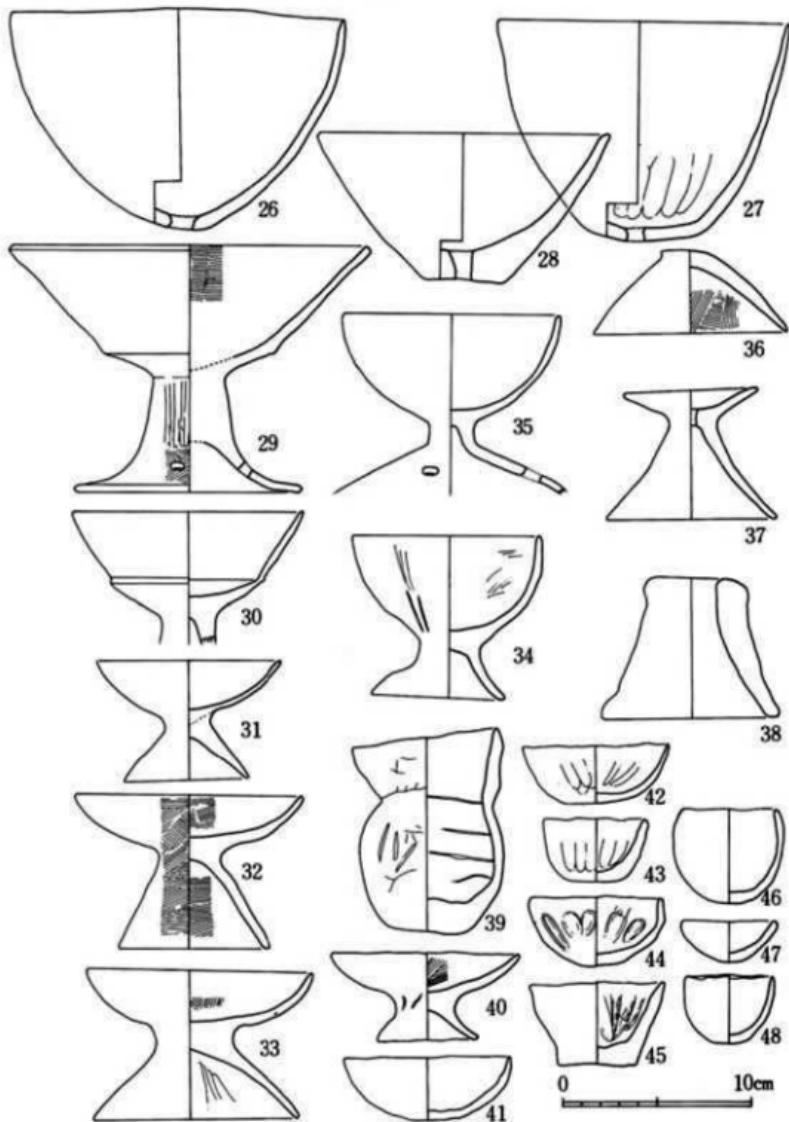
研がなされている。精選された粘土に極微な砂粉が少量含まれており、焼成も良く赤褐色を呈する。口縁径12.1cm・器高 5.3cm。

24. 口縁径10cm・器高 4.2cmの鉢形土器である。底部はやや丸味を帯びるが平底である。器物の内外とも横撫でで調整している。胎土に砂を少量含み焼成も良く黄褐色を呈する。
26. 口縁径17.8cm・器高11.7cm。胎土に砂粒を少量含み焼成も良く赤褐色を呈するが、底部は黒色である。器体の外面は撫で調整が行われている。底部には径 1.1cmの穴が焼成前に外方から穿たれているのであり、甌としての用されたものであろう。

#### 高环形土器

29. 口縁径19.3cm・器高13.1cm。環部は低位で棱をもって上位に向き、それから直線で口縁に至っている。脚部は比較的小さくラッパ状に聞く脚をもっている。口縁は範による切斷がなされ、口縁部は内側が短かい横刷毛目、外側は横撫でによる調整を行っている。脚部は継に撫でる範目が施され、台部には縦径 5mm・横径 7mmの長楕円形の穴が3ヶ穿たれ斜位に交叉する短かい刷毛目が不規則に施されている。胎土に少量の砂を含み焼成良好であり、環部は赤黄色・脚部は赤褐色を呈する。
30. 环部に比して脚部が長い高环形土器と推察される。口縁径12.4cmを測り稜をもつて上反する环部をもっている。器体の外面は横撫でで調整している。胎土に極く細の砂を少量含み焼成良好で赤褐色を呈する。
32. 口縁径12.3cm・器高 8.2cm。浅い环と三角錐状に聞く脚部からなる高环形土器である。环部外面は櫛目で斜位に短く調整した後、横撫でで最終的に整形し、内面は所々に櫛目を短く付している。脚部には横位の短かい櫛目を施している。
33. 口縁径 12.1cm・器高 8cm。浅い环と低い三角錐状に聞く脚部からなる高环形土器であって、砂粒を含む胎土であり焼成も良く赤褐色を呈する。环部内側に櫛で施した格子文が1ヶ所見られる。
34. 半球状の深い环とラッパ状に聞く小さな脚部からなる高环形土器である。胎土良好であり焼成も良く白黄色を呈する。脚部の内側は黒色を呈する。器体外面は継撫でによる調整がなされ、所々に継に走る2~3条の刷毛目痕を有し、环部内面には櫛目文がある。口縁径10cm・高さ 8.6cm。
35. 半球状の环部に裾の広がりの大きい脚部を付した高环形土器である。砂粒を少量含む胎土でいって焼成も良く赤褐色を呈する。环部の内外は横撫でによる調整、脚

第36図 方形周溝墓溝内出土器実測図(3)



部には短い刷毛目痕が交錯している。また、脚部には直径9mmの穴が3ヶ所に穿た  
れている。口縁部径11.7cm。

36. 高環形土器あるいは器台形土器の脚部と考えられる。黄褐色を呈する器体であっ  
て焼成良好である。器体の外部は横撫でによる調整、内側は粗い櫛目文が縱・横に  
施されている。現器高4.5cm。

#### 器台形土器

37. 胎土は良好、焼成も良く赤褐色を呈する器台形土器である。受器部は浅い皿形を  
呈し径7.1cmを測り、中央部に径6mmの孔を穿っている。器高7cm。

#### 支脚形土製品

38. 器高7.5cmを測り、ラッパ状に聞く文脚形土製品である。胎土に極く微量の砂を  
含む焼成良好であって赤黄褐色を呈する。

#### 手捏土器

39. 壺形土器の内側に幅1.5cm内外の間隔で接合目が横に走っており輪重みによる成  
形と考えられる。不整形で肉厚な壺形土器であって、器体にはしづり痕が隨所に見  
られる。器高10.4cm。

40. 口縁径10cm・高さ4.6cmを測る高環形土器である。砂粒を少量含む胎土であって  
焼成も良く暗褐色を呈する。環部と台部の分岐部には数条のしづり痕が見られる。  
器体の外部は横撫でによる調整、内側は粗い刷毛目が横・斜位に付して調整してい  
る。

42. 口縁径7.7cm・高さ3cmの环形土器であって内外ともに指圧痕が残っており、口  
縁部の内外は横撫でによって調整している。胎土・焼成とも良好であって黄褐色を  
呈する。

45. 口縁径7.2cmを測る鉢形土器であって、器体の内側には指圧痕があり、その上を  
更に指で上げて整形している。胎土は良好であるが焼成はやや劣り赤褐色を呈する。

### III ま と め

佐賀県小城郡三日月町に所在する戊遺跡は標高10m前後の平坦地のところにあって、旧祇園川河道に当り、祇園川の堆積作用によって形成された微高地に位置している遺跡である。

この戊遺跡においては、まずB地点に造営された墳墓が最古のものであって弥生時代中期のものである。ついでA地点に形成されている住居跡であって、近くには久蘇遺跡があり東部には佐賀市成章中学校庭遺跡・鳥栖市本川原第1号方形周溝墓などが形成される時期であって古墳時代前期に位置づけられるものである。これと相前後してC地点に方形周溝墓が造営されているのであって、この方形周溝墓は佐賀平野最西端に位置している唯一のものであり、しかも、時期的にはやや下降している戊方形周溝墓であるが中原町姫方原方形周溝墓の在り方に共通する点が認められることは注目されるところである。

条里制施行の時代をすぎた古代末期から中世初頭において、A地点では有力者による環濠住居が営まれていることは中世史研究上注目されるところである。これは、特殊な住居形態をもつ風土色豊かな集落として全国的にも注目されている環濠集落の基礎をなす初現的なものとして、この環濠住居跡は把握することができるのではないか。また、大陸から招来された青磁器等の出土など多くの問題を提起した遺跡であるということができるのではないか。

この環濠住居跡が終末を告げた後の14世紀(?)ごろ、この地域は平窯場として土器生産の主要な地域となっていたものと堆察されるのである。

将来、三日月北部の圃場整備事業が完了し、それぞれの遺跡の全面的調査が終結した時点において、三日月町の古代について更めて論攷したいと考えるので、今般は一応調査概要の報告にとどめておくことにしたい。

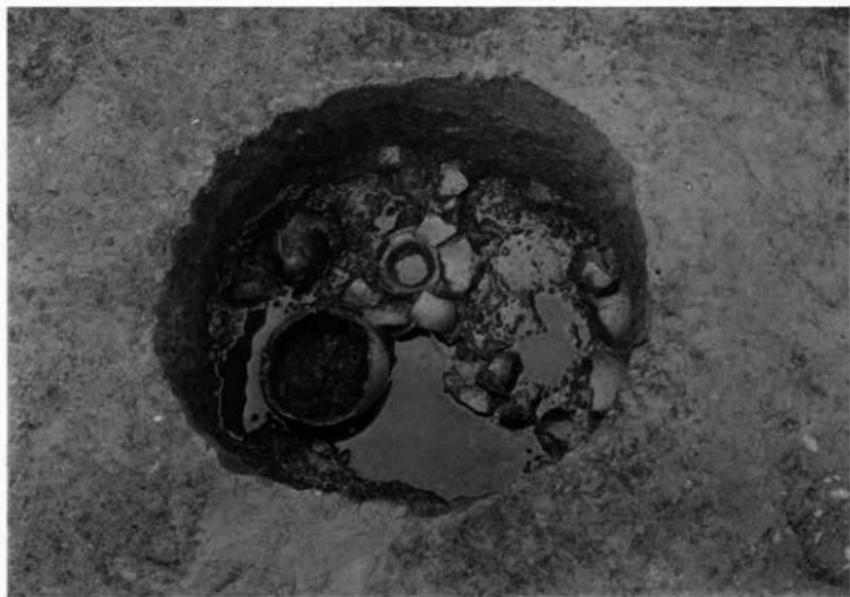


図

版



1. A区Pit 1の状況 (A地点)



Q9270608-(2)

2. A区Pit 2の状況



Q9270608-(2)

3. Pit 1周辺出土の土製品



(3) 870467-⑨



(3) 870467-⑩



(3) 870467-⑪左



(3) 870467-⑫左



(3) 870467-⑬左



(3) 870467-⑭左

4. 第1EW溝付近の状況（Pit 1地区）



870608-3

5. 第1EW溝断面（外溝）



870607-2

6. 第1EW溝付近の状況（外溝）



② 870607-①

7. 第1EW溝断面（外溝）



② 870607-②

8. 第1NS溝北部遺物出土状況（外溝）



80870607-④

9. 第1NS溝北部断面（外溝）



80870607-⑤

80870607-⑥

10. 第2 NS 溝南門付近（内溝）



Q870481-③

11. 第2 NS 溝断面



Q870481-②

12. 第3 NS 溝門付近（内溝）



85870481-(②)

13. 南門址の周辺



85870481-(④)

14. 井戸址(1)



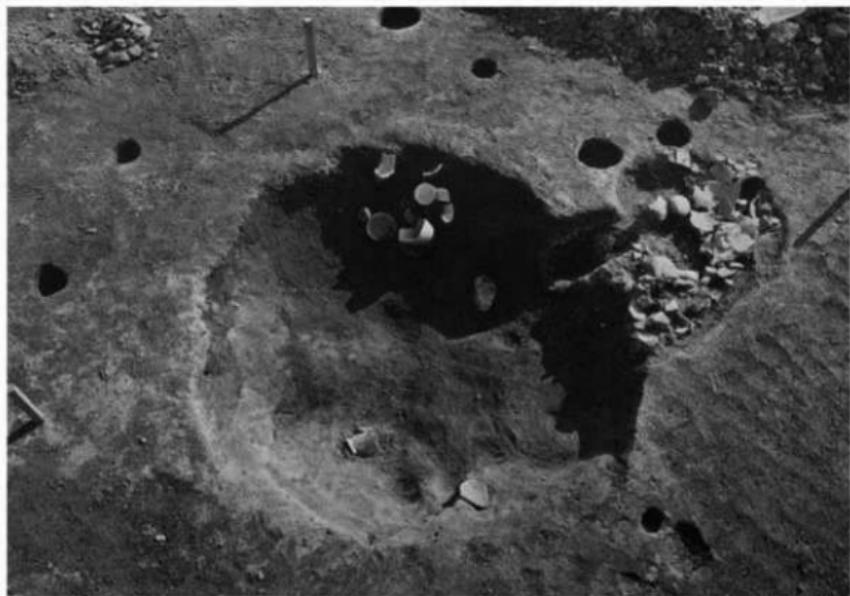
⑥870481-⑧n6

15. 井戸址(2)



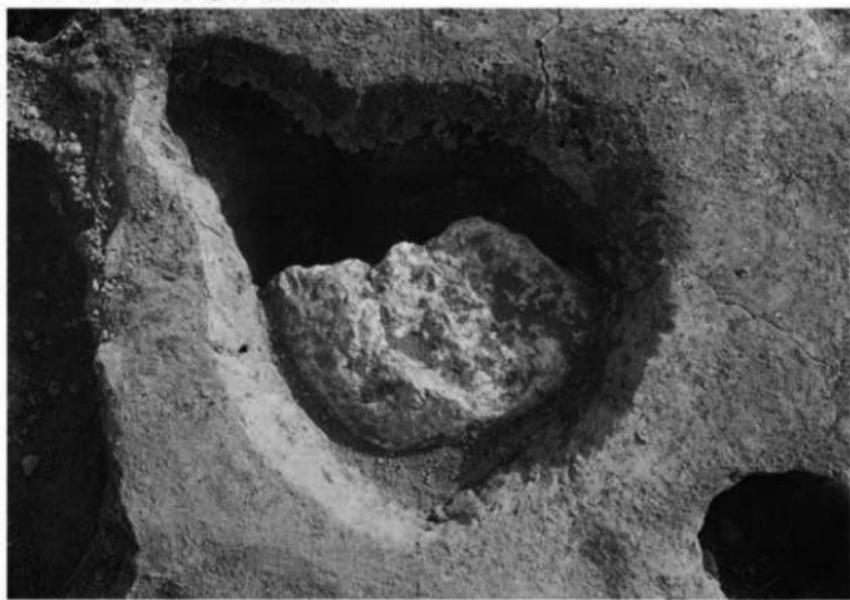
⑥870481-⑨

16. Pit 3 の状況



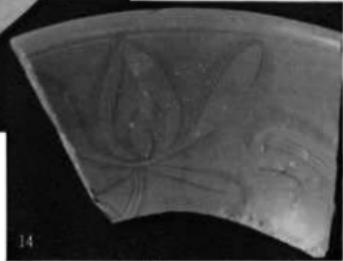
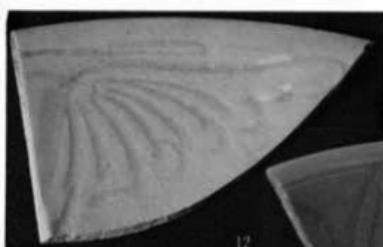
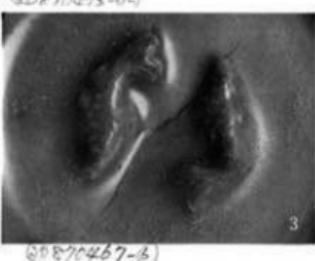
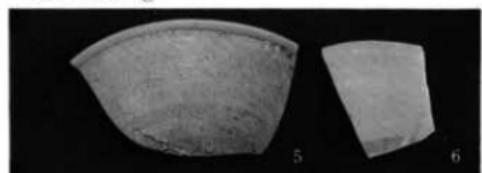
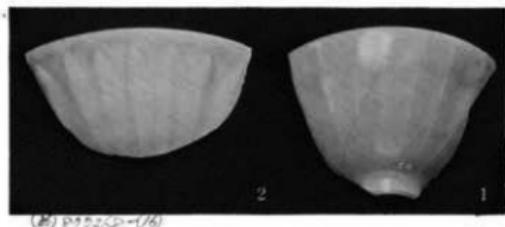
(2)870481-016

17. 掘立柱の礎石の状況



(2)870481-9

18. 青 磁 器



QD870468-⑤

QD870268-⑩

QD870468-⑩

19. 瓦 器



◎870472-②



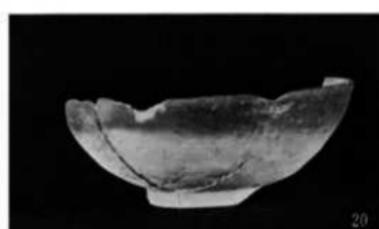
◎870472-③



◎870472-④



◎870472-⑤



◎870472-⑥



◎870472-⑦

20. 滑 石 製 品

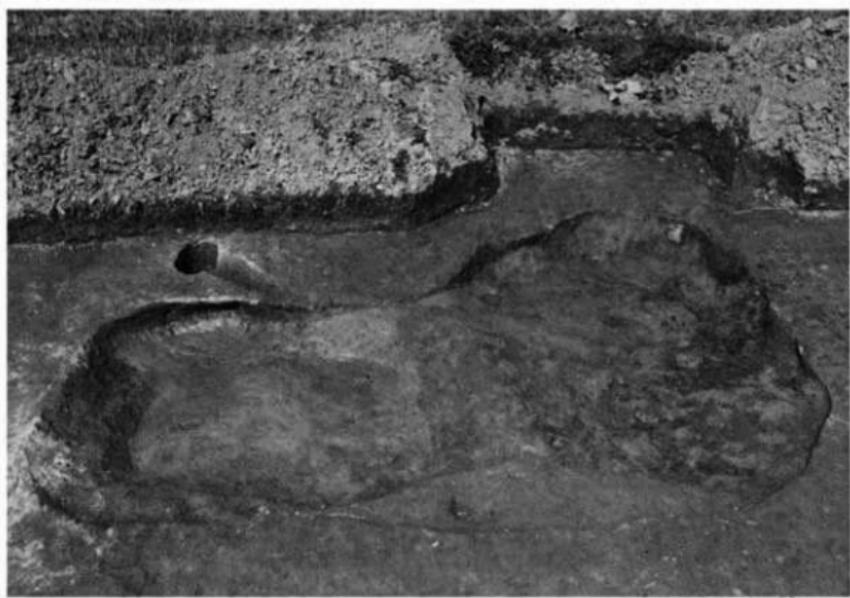


21. 窯跡(1) (左B窯・右A窯)



④ 870603-28(1)

22. 窯跡(2)



④ 870607-28

23. A 窯土器出土狀況 (1)



Q8270608-①

24. A 窯土器出土狀況 (2)

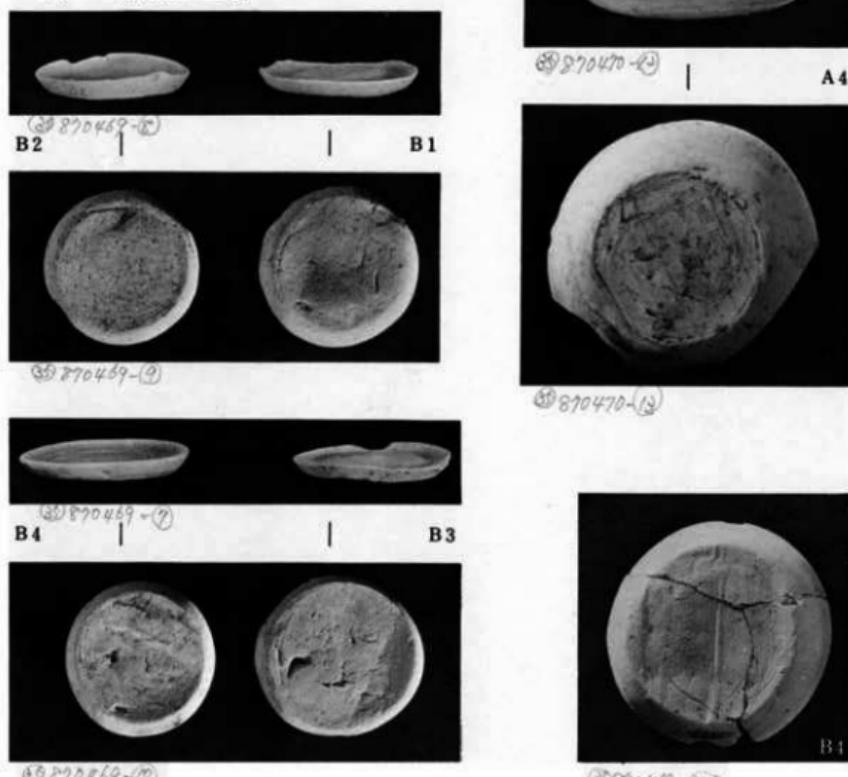


Q8270608-②

25. A 窯出土土器



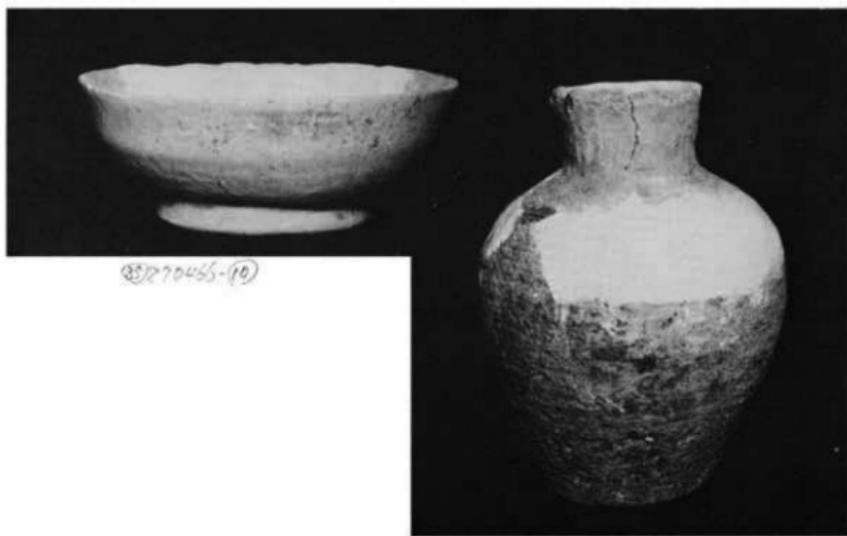
26. B 窑出土土器



27. 井戸址出土青磁器



28. A区H-1出土土器

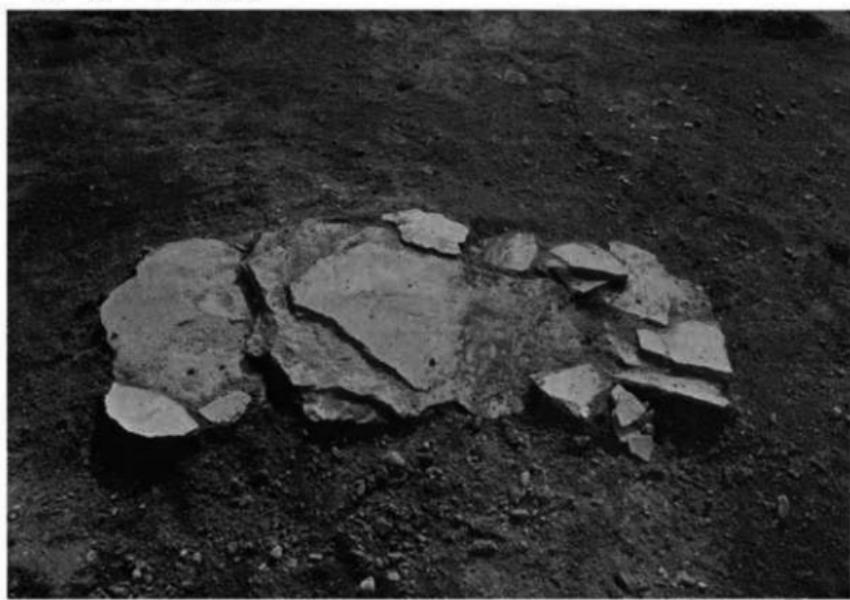


29. 第1号甕棺墓・第2号石蓋土壤(B地点)



◎ 870479-(4)

30. 第1号石棺墓



◎ 8870481-(2)

31. 第 2 号 石 棺 墓



Q0870479(2)

32. 第 5 号 瓷 棺



Q0870466(2)

33. 住居址



34. 住居址の土器出土状況



35. 住居址出土土器 (B 地点)



⑤870466-(1)



⑤870466-(9)



⑤870466-(2)



⑤870466-(12)



⑤870466-(3)



⑤870466-(13)



⑤870466-(5)

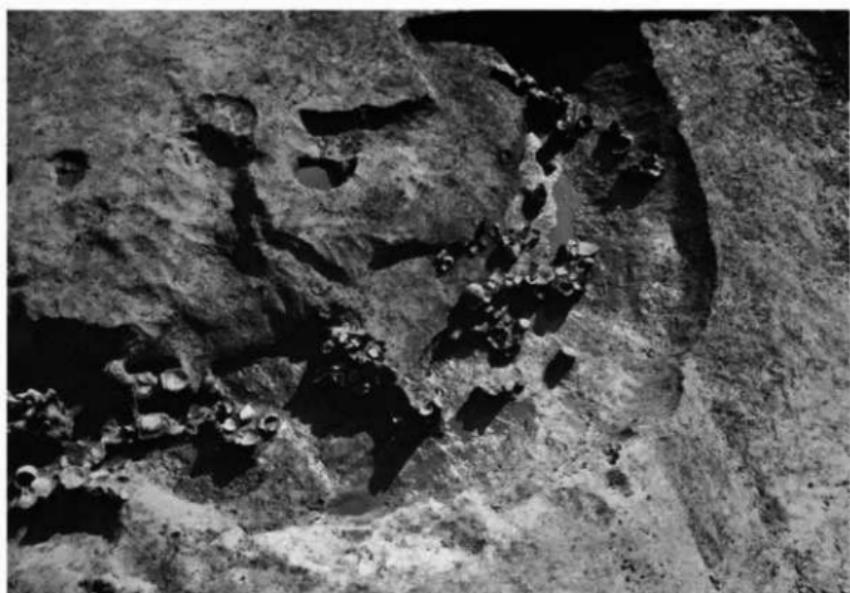


⑤870466-(14)

36. 方形周溝墓(1)(北東隅)(C地点)



37. 方形周溝墓(2)(北西隅)



38. 方形周溝墓溝内の土器出土状況



(3870481-6)

39. 方形周溝墓断面（北西溝）



(3870481-6)

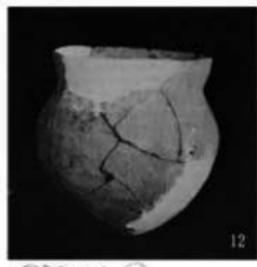
40. 方形周溝墓出土土器(1)



1



9



12



2

(3) 870475-⑦



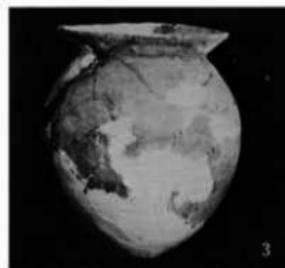
13

(3) 870475-⑧



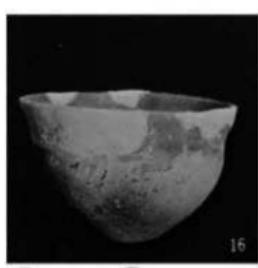
14

(3) 870475-⑨



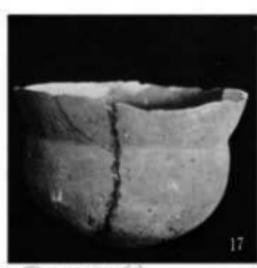
3

(3) 870466-⑦



16

(3) 870475-⑩



17

(3) 870475-⑪



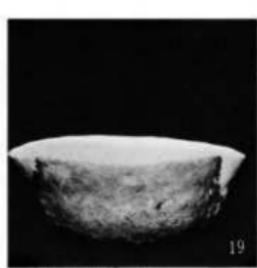
8

(3) 870475-⑫



18

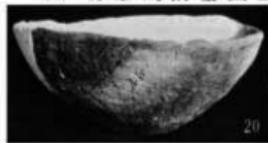
(3) 870475-⑬



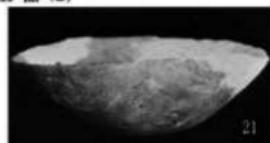
19

(3) 870466-⑭

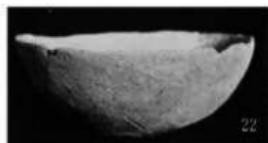
41. 方形周溝墓出土土器(2)



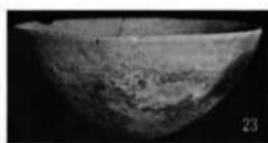
⑤870475-⑧



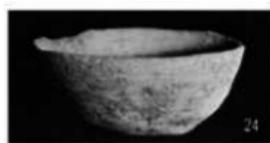
⑤870475-⑨



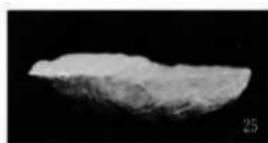
22



23



24



25

⑤870475-⑩

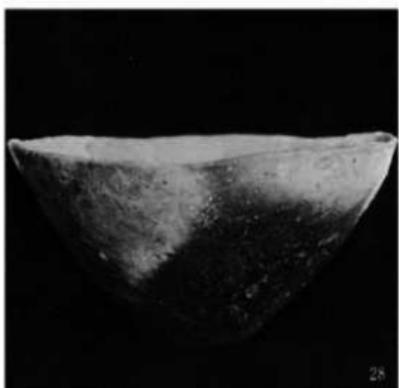
⑤870475-⑪

⑤870475-⑫



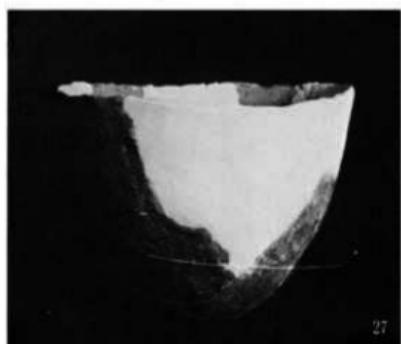
26

⑤870475-⑬



27

⑤870475-⑭



28

⑤870475-⑮



29

⑤870475-⑯

42. 方形周溝墓出土土器(3)



89870475-⑤



89870475-③



89870475-④



89870475-⑥



89870475-⑦

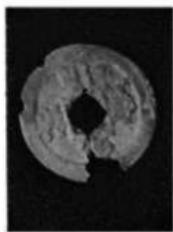


89870475-⑧

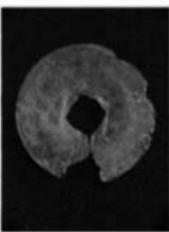


32

89870475-⑨



元祐通宝 (表)



(裏)

43. 方形周溝墓出土土器(4)



QD870475-30



QD870475-31



QD870475-32



QD870475-33(A)



QD870475-34(B)



QD870475-35(C)



QD870475-36(D)



QD870475-37(E)



## あとがき

1. 現場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査が相続ぐ中での戊遺跡の調査であった。2月28日までが戊遺跡の現場調査であって、整理・執筆期間が時間的に満足でないことは事実であり、したがって説明不足等の点については将来補足していきたい。
2. 本報告書の作成担当者は次の通りである。

★監修 木下之治 佐賀県教育府文化財調査監

★実測 木下 巧・天本洋一・七田忠昭

★整図・トレース 七田忠昭

★写真 木下 巧

★執筆・編集 木下 巧

佐賀県文化財調査報告書第36集

## 戊 遺 跡

印 刷 昭和51年3月31日

発 行 昭和51年3月31日

編 集 佐賀県教育庁文化課

発 行 佐賀県教育委員会

印 刷 佐賀県印刷局

第3図 戊遺跡A 地点遺構配置図

